

フォークダンス

由布園

シンガーソングライターあさひはびわこホールの舞台に立とうとしていた。
舞台袖から観客を見る。
一列目の一番真ん中の席。
コンサートは 18 時 30 分から始まる。
今は 18 時 25 分。
その時点であさひはがっくりと肩を落とす。
一列目の一番真ん中の席に座るはずの男は、池内憲治。
あさひの恋人。
開業医をしている。
あさひと憲治の二人はうまくいってなかった。
憲治とデートで喧嘩しそれから会っていなかった。
あさひはそれでも憲治のことが好きだった。
あさひの心の中から憲治を追い出そうとしても追い出そうとしてもどうしてもできなかった。
そこであさひはかけに出た。
ツアー初日のびわこホールのど真ん中の一列目を憲治にプレゼントした。
これでもし憲治が来なかったら…
その時はそれで諦めようと思った。
憲治はデートの時にいつも先に待ち合わせ場所に来ていた。
待ち合わせの時間の 30 分ぐらい前に。
その憲治が開演 5 分前になっても来ない。
この時点でもう二人の愛は終わってしまっているのかも知れなかった。
あさひは溢れてくる涙をぐっところえながら、一番前の真ん中の席を見つめていた。
今日は超満員。
でもどんなにホールを埋め尽くしてもただ一人一番来て欲しいのは憲治だった。

あさひは幼少期、思春期と悲惨な日々を送っていた。
小学校の頃のあさひは女の子の自覚がなかった。
あさひは口下手なところもありいつも意地悪な女の子に口げんかで負けていた。
するとあさひは。
口では到底意地悪な女の子には勝てないのでかっとなりブチ切れてその女の子に取っ組み合いのけんかを仕掛けた。
その女の子の上に覆いかぶさるのだ。
そしてつい胸倉をつかんでしまう。
女の子はすぐ泣き出してしまう。
その時点で先生から止められ、いつもこっぴどく怒られていた。

あさひはクラス中の女の子から野蛮人を見る目で見られることになった。
あさひは運動場でどろんこになって遊ぶのが好きだった。
そして運動場の土が体についてもそれを洗おうとしない。
そして給食の食べ方も汚かった。
いつも大量に給食を制服にこぼして食べていた。
いつも不潔にしていた。
女の子だから綺麗にしないといけないという観念がないのだ。
あさひのあだ名は「男女（おとこおんな）」「バイキン」だった。
あさひは女の子からは野蛮人と嫌われ、男の子からはバイキンと嫌われていた。
あさひはいつも孤独だった。
友達を作ろうとしても女の子からすぐ意地悪なことを言われて傷つく。
どうして女の子はこんなひどい言葉を発するのだろう。
それが全然理解できなかった。
そして同時に意地悪なことを言われてすぐに傷ついてしまうような自分の弱さが情けなかった。
周りを見るとみんな友達同士で笑いあって楽しそうなのに。
どうして私にだけ友達ができないのだろう。
私はどうして意地悪なことを言われても友達がい続ける強さがないのだろう。

そしてあさひを孤独にしたのは友達ができないことではなかった
男の子からバイキンと言ってはやされるのだ。
一緒に班になってもこうだ。
「あさひと一緒にの班かあ、最悪だ。
「こんな汚い奴と隣の席かあ、早くこの学期終わって欲しいな。」
フォークダンスの時もあさひの番になると、男の子からはこう言われる。
「お前みたいな奴と手なんか繋げるか。」
それを見て先生が男子を怒っても男子はまるで糞尿にふれるように少しだけしか手を繋ごうとしなかった。
あさひはこれも情けなかった。
こんな自分では将来結婚することもできないんじゃないか。
いや結婚どころか恋をすることさえも許されないんじゃないか。
男子から憧れられている顔が美人で花のようなクラスメイトを横目で見つめ、いつも醜い自分が嫌になった。
授業中も自分が情けなくていつも泣いていたのでぽつんと落ちた涙のしみが教科書にしみついた。
そんなあさひに一筋の光を見出す出来事が起こった。

やがて隣のクラスに初恋の人ができる。

真っ暗闇の幼少期だったあさひ。

でもそんなあさひにも 3 つ特技があった。

ピアノが誰よりうまい。

歌が誰よりうまい。

そして放送が得意。

あさひは声が良かったので放送委員に選ばれていた。

そんな放送委員が小学校 3 年生から 6 年生まで各クラス男女 2 名選出された。

放送委員に選ばれた男女が各学年無作為にペアになり月曜日から金曜日までテレビ放送する。

放送の内容はペアで決める。

放送部の先生がビデオカメラで撮影ししてくれる。

放送部の先生が適当に決めたペアであさひは透君という男の子とペアになった。

隣のクラスだった。

透君はあさひが隣のクラスで男女から嫌われていると知らない。

初めて出会ったとき、くったくのない笑顔で

「あさひさんですか？」

これから 1 週間よろしくお願いします。」

とあさひに言った。

透君はすごくハンサムだった。

おまけに声がすごくいい。

一足早くみんなより声変わったみたいで大人の男の人の声だった。

透君はそんな低い自分の声を自分では嫌っていたけど。

あさひは透君は顔も素敵だけど声が一番に好きになった。

「何の放送をする？」

あさひさんは何がいい？」

あさひはあまりに透君がまぶしくてすぐにアイデアを出すことができなかった。

放送は 2 週間後なので時間があるのでお互いに宿題ということになった。

あさひはぼうっとしてともに透君と会話ができなかった。

あまりに透君がまぶしくてその姿を見ているだけで声を聴いているだけで胸がつまって何も言葉が出てこない。

いつも自分の醜い外見や心の中の嫌な部分について考えてばかりで恋をする余裕すらなかった。

でもこの日初恋が予期せずやってきて自分でもどうしたらいいかわからなかった。

それより宿題を片づけなければと思って取りあえず考えてみることにした。

女の子からは友達になってもらえなくて男のからはバイキン扱いされて孤独なあさひ

だったけど、救いはあった。

音楽だ。

あさひは幼稚園の頃からピアノを習っていた。

それがすごくあさひに合っていて、幼稚園を卒業と同時に黄色いバイエルが終わっていたぐらいだ。

その後大学を卒業するまであさひはピアノを習い続けることになる。

あさひは悲しいことがあるといつも家に帰ってピアノを弾いて歌って紛らわしていた。また音楽を聴くのが大好きだった。

主に女性シンガーソングライターの曲を聴くのが好きだった。

家に帰って最初まずすることが好きなシンガーソングライターのLPを聴くことだそして透君と出会ったその日も音楽を聴いていた。

何だかいつも孤独の中で聴いていた音楽が違って聴こえた。

恋愛の歌がずっと自分の中に入ってくる。

まるで自分の心情を歌われたみたいだった。

そしてふと名案が浮かんだ。

そうだと思った。

1年生から6年生まで各教室に行って、「好きな歌は何ですか？」とインタビューしに行くのはどうかと思った。

学年によって好きな歌が違ったりして面白いんじゃないかと思った。

その案を透君に言ったら透君も音楽が好きみたいで大賛成だった。

そして1年生から6年生まで昼休みにインタビューに行く。

引込み思案のあさひだったが、透君といると積極的になれた。

この企画は大成功ですごく楽しい放送となった。

学校生活で笑顔になってなったことのなかったあさひが初めて心から笑えたひとときだった。

透君とあさひの距離も少しずつ近くなっていった。

しかしこんなことが起こってしまった。

インタビューをしていた日々は楽しかったが次の日からまた地獄の始まりとなった。

あさひは光り輝く場所から暗闇へ逆戻りとなった。

透君にはもう会えなくなってしまった。

そしてこの放送日にあさひは更に地獄を見ることになるのだ。

2週間後透君とあさひのインタビューが放送された。

たまたま透君の友達があさひのクラスにいるので給食を終えた透君があさひのクラスに来ていた。

そんな中透君とあさひがペアになっているインタビューが始まったので、あさひを嫌っている男の子がはやしたてた。

「お前、こんな女と付き合っているのか？」

「透はこんなブスが好きなんだ。」

「透とあさひはできてるんだ!!」

「透バイキンがうつるぞ!!」

「透、趣味悪っ!!」

透君は真っ赤になっていた。

そして透君によって巨大な言葉のハンマーがあさひに落とされる。

「付き合ってるわけないだろ!!」

俺、こんなブス嫌いだ。」

あさひに更に不幸が起きる。

「あさひに彼氏なんてできるわけないでしょ？」

ましてやモテモテのハンサム透君と嫌われ者で醜いあさひなんて似合うわけないじゃん。」

あさひはかち一んときてしまった。

そしてまたその女の子の上に覆いかぶさってしまった。

自然に胸倉をつかんでしまう。

またやってしまった。

しかも大好きな透君の前で。

透君が化け物を見る目で恐怖に戦いてあさひを遠くから見ているのが見えた。

あさひの初恋はあっさりと終わった。

でも更に悲しい出来事があさひの上に降り注ぐ。

キャンプファイヤーで学年全体でフォークダンスを踊ることになったのだ。

それだけでもあさひは憂鬱だった。

フォークダンスなんて一生踊りたくなかった。

フォークダンスはクラスの男の子が終わり、隣のクラスの男の子の番が回ってきた。

そして透君の番になった。

例えフォークダンスでもいい。

透君と手を繋ぎたかった。

その時だ。

「あっ、透良かったな。」

大好きなあさひだ。」

「透趣味悪いな。」

こんな女好きなんだな。」

「バイキンとアイドルのカップルか!!」

またクラスの男の子がはやし始める。
すると、透君は軽蔑するような顔をして私を見た。
そしてやっぱり他の男の子がするように汚いものでもつまむようにあさひと踊った。
あさひはみじめで情けなくて涙が流れてきた。
泣きながらフォークダンスを踊った。
醜くてみんなから嫌われている女の子にフォークダンスなんて酷だ。
いったい誰が男女ペアで踊るダンスなんて考えたんだろう。
あさひはフォークダンスを考え付いた人さえ憎んだ。
でもそれでもあさひは透君が好きだった。
卒業式の時に少しでも話をしたいと思い始めた。
恋をする余裕もないぐらいに学校生活に悩んでいたあさひ。
そんなあさひの心の中の荒野にぽつんと咲いた美しい花、それが透君だった。
例え嫌われていても透君をいつも遠くから見つめていた。
顔を見るだけで、声を聴くだけで幸せだった。
やがて卒業式が終わり、その後、帰ろうとする透君を引きとめた。
「なんだよ。
俺、早く帰りたいんだけど。」
あのインタビューをペアでしていた時の大好きな笑顔がそこにはなかった。
「あの、インタビューをしていた時、私の 6 年間で一番幸せでした。
透君とペアだったのですごく楽しかったです。
それだけ、それだけ言いたかったの。」
「それだけ？」
「じゃあ、帰るわ。」
明らかに周りを気にする表情だった。
またあさひと話してたら男子にからかわれるから。
「最後に一言だけ言っておく。
お前、なんか変だな。
変な行動、やめた方がいいよ。」
あさひが変だと言われたのはこれで何 10 回目だろう。
でもこの時ほど傷ついたことはなかった。
確かにあさひはいつも不潔にしているけど平気だし、かっとなったら女の子の胸倉をつかむし。
男の子みたいな部分が多い。
でもそれを初恋の透君に言われたらショック過ぎる。
この言葉はあさひの一生傷となった。

『あさひは変だ』 そう言われたのは初めてじゃない。

中学、高校、大学、そして家族。

10 回以上は言われてきた。

『どうしてこんなに自分は自然にしているのにみんな変だと言うんだろ？』

あさひはそのたびに悩んだ。

そしてこんなこともある。

友達ができないのだ。

中学、高校、大学、就職先の職場、いつも孤独だった。

そんなあさひにも友達ができた。

中学 2 年の時のことだった。

あさひは中学に入っても友達ができずにいつも休み時間は音楽室で一人寂しくピアノを弾いていた。

その日も昼休みあさひは音楽室でいつも通りピアノを弾いていた。

すると突然後ろから歌声が聴こえる。

ふと振り向くと長い髪をした美少女が立っていた。

「この美しいピアノの旋律はあなたさんだったのね。

いつも教室でぼうっとしていたらどこからともなく美しいピアノの音が流れてきてね。

しかも私が一番好きな曲だし。

どんな素敵な人が弾いているのかなってずっと気になってたの。」

「がっかりしたでしょ。

こんな醜い女の子で。」

「あなたが醜い？

何言ってるの、すごい美人よ。」

美人な女の子にそんなことを言われても空しいだけだ。

あさひは少しも嬉しくなかった。

「思った通り、いえそれ以上に素敵な人よ。

あなたもっと自分に自信を持った方がいいよ。

素敵な顔で素敵な声、それにこんなにピアノがうまいのに。」

「そ、そんなこと言われたの初めて…」

その少女はあさひを見てくすつと笑った。

「私は峠千鶴と言う名前。

これからは千鶴でいいよ。」

「わ、私は根本あさひ。」

「これから私の友達になってくれない？

いつも昼休みにここへ来てもいい？

あなたのピアノに合わせて歌を歌いたいわ。」

友達になってなんて。

そんなことあさひは言われたことなかった。

いつだって女子は獣を見る目であさひを見て。

あさひは中学校になったらどんなに腹が立っても女の子にくっつくことはやめようと思った。

透君に変だって思われたくなくて。

透君とはあの後も同じ中学になり時々廊下で挨拶をすることはあった。

でも小学校で一緒にだった女の子たちが小学校の頃のあさひの行動を話すので中学校一緒にだった女の子たちもあさひを野蛮人を見る目で見ていた。

幸い千鶴は全然違うクラスだった。

「千鶴はクラスに友達はいないの？」

「なんか今のクラスハズレかも。

意地の悪い子が多くて。

おまけに派閥もあるの。

私はどの派閥にも加わりたくなくて一匹狼なの。

ご飯も一人で食べてここへ来ているの。

あっ、明日からここで一緒に食べない？」

中学校に入ったらお弁当になってみんな各々仲のいいグループと食べてて。

あさひはいつもどのグループにも入れてもらえなくて一人ぼっちで食べていた。

時々孤独が辛くて泣きながら食べている時もあった。

だから食事を一緒に取ろうなんて千鶴みたいな可愛い女の子から言われて嬉しくて天にも昇る気持ちだった。

千鶴とあさひはすごく仲が良くなった。

お互いに音楽が好きで。

千鶴の大好きな曲を演奏すると千鶴がすごく喜ぶ。

そんな時至福の幸せでこのまま昼休みが終わらなければいいと思う。

お互いにお勧め LP を貸し合いした。

やがて 3 年生になり、偶然同じクラスになった。

あさひと千鶴は毎日一緒に行動できるようになり、より一層仲良くなった。

千鶴はこれまで出会ったどんな女の子よりさっぱりした性格で、女の子特有の意地悪や嫌味を全く言わない女の子だった。

あさひは千鶴から傷つけられることはなかった。

あさひは 14 歳になり生まれて初めて友達ができた。

そして同じクラスでその友達と一緒に行動できるようになったのだ。

これからが本当の青春だと思った。

そうこれからが。

もしあさひが恋をしなかったら、良かったのか。

その日もあさひと千鶴が仲良く音楽室で遊んでいた時のこと。

二人の男の子が入ってきた。

どちらも眩しいくらいにかっこいい男の子だった。

「お前らこんなところで遊んでたんだな。

毎日すごく綺麗なピアノの演奏と歌声が聴こえるなってずっと二人で言ってたんだよ。

へえ、ピアノ本当にうまいね。

君なんていう名前？」

この二人は二人とも顔がかっこいいが1人はノッポ、一人は小さかった。

その小さい男の子の方がそう言ってあさひを覗き込んだ。

あさひは生まれてこの方男の子に褒められたこともなかったものでびっくりしてしまい何も話せない。

「ね、ね、根本あさひ。」

そう答えるのがやっとだった。

「あさひちゃんかあ。

可愛い名前だね。

顔も可愛いし。」

名前も顔も可愛いなんて言われて。

あさひはあまりのことに卒倒しそうになる。

こんなかっこいい男の子が自分の容姿を名前を褒めるなんて。

「あさひちゃん。

これからは俺の好きな曲を弾いてよ。

毎日ここに歌いに来てもいい？

俺ら二人も一緒にギターでペア組んでるんだよ。

文化祭の時に一緒にステージに上がって歌を披露するんだよ。

お楽しみにね。

でもピアノは俺たちどちらも弾けないしな。

俺ら、楽譜が読めないんだ。

また教えてくれると助かるな、あさひちゃん。」

『あさひちゃん』なんて男の子に優しく呼んでもらったことなかったので心臓が爆発しそうになる。

「俺、坂巻勘之助という、古風な名前なんだ。

勘ちゃんでもいいよ。」

背の高い音の子の方はこう言った。

「俺は吉川和美

女の子みたいな名前なんだ。

かずでいいよ。」

この日から男の子が2名昼休みの演奏会に加わった。

男の子が2名加わったので演奏会はすごくにぎやかになっていった。

あさひと千鶴が楽譜を教える代わりに、勘ちゃんとかずがギターを教えてくれた。

ある日千鶴と二人だけの時があった。

勘ちゃんとかずはクラスの男の子とバスケに行っていたのでいなかった。

「ねえ、あさひ。

勘ちゃんとかずならどっちが好み？

私はかずの方がすらっとしてて好みだな。

顔もかずの方が好き。

あさひは？」

「私は…

勘ちゃん…」

小学校の時透君を好きになったときは、クラスの女の子にばれていたみたいだった。

その時はひどいことを言われた。

「身の程をわきまえなさいよ。」

そんな経験があるから、友達に自分の胸のうちを明かすのはすごく怖かった。

また身の程知らずだなんて言われるのかと思って。

「良かった!!

あさひが勘ちゃんの方が好きで。

かずが好きって言ったらどうしようかって思ってたの。

良かった。」

あさひは初めて会った時から勘ちゃんが大好きだった。

だから、千鶴が勘ちゃんじゃなくかずの方が好きで良かった。

「これから私が恋のキューピットになってあげる。

ダブルデートしようか？

そしてかずと私、勘ちゃんとあさひがさりげなくペアになるの。

楽しそうでしょ。

そしてお互いに告白しようよ。」

ダブルデートの日がやって来た。

あさひにとって人生初のデートだった。

遊園地のデートだった。

「提案があります。

ペアになることにしませんか？

私はかずがいいな。

じゃあ、あさひは勘ちゃんね。」

男の子二人はあっけにとられていたけど、千鶴が強引にかずのコートの袖を引っ張って行ったので有無を言わせずかずと千鶴、勘ちゃんとあさひのカップルになってしまった。あさひは生まれて初めての好きな人との二人っきりのデートにときめいていた。

「あさひちゃん。

何か乗りたい乗り物ない？」

あさひちゃんと呼ばれてより一層恥ずかしい。

アトラクションの案内の冊子を見つめるあさひ。

「急流すべり。」

それだけ言うのがやっとだった。

「わあ、これテルテル坊主みたい。」

水に濡れたらいけないのでテルテル坊主みたいなカバーを被らないといけない。

「テルテル坊主テル坊主!!」

はしゃぐ勘ちゃんが可愛くて眩しくて直視できない。

そして6人乗りの急流すべりに乗った。

揺れがすごいので時々、勘ちゃんの体があさひに当たる。

その旅心臓がおかしくなりそうだった。

このまま時が止まって欲しかった。

できたらこのままでいい。

友達の間まで。

でも昨夜電話で千鶴と約束してしまった。

「お互いに明日のデートで好きって告白すること。

そして付き合ってくれって言うこと。

裏切りっこなしょ。」

二人でハンバーガーを食べていた時に、思い切ってあさひは言ってしまった。

「あのね、勘ちゃん、あのね。

私、勘ちゃんが好き。

できたら付き合って欲しい。」

人生初の告白だった。

自分にこんな勇気があるなんて思いもしなかった。

でもあまりに勘ちゃんが好きで好きで、言わずにはいられなくなった。

千鶴との約束もあったし。

でも…

「ごめん。

気を悪くしないでね。

俺、あさひちゃんのことそんな風に見たことなかった。

大切な友達としか見たことなかった。

本当にごめん。」

あさひの二度目の恋も玉砕だった。

そしてその後、なんとなく気まずくなったのでやっぱり 4 人で行動することにした。

ちょうど隣のアトラクションから降りてくる千鶴とかずがいたので勘ちゃんが呼び止めた。

「お二人さ——ん。

やっぱり 4 人で行動しようぜ!!」

あさひはいつも通り千鶴に話しかけようとした。

「ねえ。千鶴。

やっぱり 4 人で行動しようよ。」

そう話しかけたら、無視された。

「勘ちゃん、ジェットコースターと一緒に乗って!!

今度は勘ちゃんとペアね!!」

「千鶴、かずは…」

そう言ったのにまた無視。

その後も千鶴はずっと勘ちゃんにべったりだった。

時々二人でひそひそ話をして笑い合っていた。

仕方ないのであさひはかずと一緒に行動した。

次の日、いつも一緒に登校していた千鶴が待ち合わせの場所にいない。

何時になっても来ないのだ。

危うく遅刻しそうになったので先に学校へ行った。

すると、千鶴は勘ちゃんと一緒にいた。

あさひと目が合うと、千鶴はこう言った。

「私、勘ちゃんと付き合うことになったの。」

勝ち誇った目であさひを見る。

こんな意地悪な目をした千鶴を初めて見た。

小学校の頃の女の子たちのねちねちとしたいじめを思い出す。

千鶴だけはこんな意地悪な目をするとは思ってなかった。

「ちょっと話があるの。

勘ちゃんちょっとごめんね。」

廊下に私を連れて行った。

「金輪際、あさひとは友達の縁を切ることにしたの。

ひとりで行動してちょうだい。」

千鶴の目は。

今まで意地悪された誰の目よりも意地悪で悪意に満ちていた。

あれだけ優しくかった人間がこんな目になってしまうのだ。

「それと勘ちゃん私のことが好きだったみたい。

だから勘ちゃんと付き合うことにしたの。

あさひ、羨ましい？」

冷たく微笑む千鶴。

「あのデートの日、勘ちゃんから告白されたの。

勘ちゃんとこれから登下校一緒にするしあさひはもういらなくなったわ。」

「どうして!!

千鶴はかずが好きなんでしょ。

それに一緒に行動できないなんてひどいよ。

私たち友達なのに。」

「友達？」

これ以上ないぐらいの冷ややかな微笑みだった。

「最初からあなたが寂しそうにしていたから可哀想に思って近づいただけよ。

私はあなたのこと友達だなんてこれっぽっちも思ったことなかったよ。」

「そんな、ひどい…

私は千鶴のこと大切な友達だって思ってたのに。

勘ちゃんのことだって…

私昨日ふられたのに。

千鶴もお互いに付き合えるといいねってあの晩話したじゃない。

なのに千鶴と付き合うなんてひどいじゃない。」

決定的な一言が千鶴の口から発せられる。

「なんかあさひ飢えた子みたいね。

見苦しいよ。

私にやきもちやいて…

今のあさひすごく醜いよ。

嫉妬に狂ってて。

そんな見苦しいから勘ちゃんにもふられるのよ。」

新たな孤独の始まりだった。

一度友情の幸せを知ったから、余計に真つ暗闇の孤独な青春を送ることになる。

こんなことなら友情も恋も知らなければ良かった。

そしてこの後ずっと学生時代は友達を作らない女の子になっていった。

そんなあさひの唯一の楽しみは。

千鶴との楽しかった日々を思い出してしまうので音楽室でピアノを弾くことさえやめ

てしまったので、家で一人でピアノを弾くことだけだった。

あさひはありとあらゆる曲をピアノで弾いた。

ある時、千鶴が大好きだった曲を弾いてしまった。

『あなたもっと自分に自信を持った方がいいよ。

素敵な顔で素敵な声、それにこんなにピアノがうまいのに。』

あの日千鶴が言ってくれた言葉。

それはどんなにあさひを元気づけてくれて自信をもたせてくれたことだろう。

でもあの楽しかった日々にはもう戻れないのだ。

『なんかあさひ飢えた子みたいね。

見苦しいよ。

私にやきもちやいて…

今のあさひすごく醜いよ。』

次に千鶴が投げつけたあのひどい言葉が蘇る。

まるで自分を褒めてくれた言葉は嘘だったと言うように。

あの楽しかった日々をすべて打ち消すように。

あさひは色んな曲を弾いて現実から逃げようとした。

でもどんな曲を弾いても、もしかしたら千鶴もこの曲が好きかもなんて思ってしまう。

妄想の中で千鶴がピアノを弾いているあさひの後ろから去って行ってくれない。

ふと曲が生まれた。

「どうして私だけ人並みの幸せが掴めないんだろう

どうして私だけこんなに辛いことばかり起こるのだろう」

そのフレーズが一番に浮かんだ。

サビの部分だった。

そしてAメロ、Bメロと浮かんできたのだ。

あさひは自分は恋すら許されないので歌なんて作れないと思い込んでいた。

一度ラブソングを作ろうとしたけど両思いになんてなったことなかったので詞が浮かばず、そこでつまづいて曲が作れなかった。

あさひが初めて曲を作った瞬間だった。

あさひは友情も恋も無くして、青春の孤独の中で初めて曲ができた。

苦しい青春の曲ならあさひはいくらでも作ることができた。

あさひはやがて大学生になった。

高校と違って大学は講義ごとに自由席なのであさひは高校の時ほど窮屈な思いをしなくて済んだ。

1人で行動していてもまわりから白い目で見られることもない。

煩わしいのでサークルにも参加しなかった。

ただ自分の作った曲は何 10 曲とストックができた。
あさひは尊敬する好きなアーティストも昔受けたことのあるコンテストに参加することした。
あさひは軽い気持ちで応募した。
自分がこのコンテストに出られること自体夢のまた夢だと思っていた。
しかしある日応募したカセットテープの曲が一次審査を通過したのだ。
第二次審査のコンテストに出られることとなった。
このコンテストは参加者に特別にホテルも用意してもらえた。
ただし相部屋なのが嫌だなとあさひは思った。
千鶴と友達じゃなくなった後に行った修学旅行を思い出した。
千鶴は新しくできた友達と仲良くしていた。
偶然部屋割りが一緒になって。
みんなの中心になりはしゃぐ千鶴。
あさひは一人ぼっちで部屋の片隅にいた。
寂しくて悲しくてその晩は一睡もできなかった。
コンテストの前日、宿泊させてもらえるホテルに着いた。
そして集合場所には女の子がいっぱい。
当時女性シンガーソングライターブームであさひと同じシンガーソングライターを目指す女の子は日本中にいっぱいいた。
そして 10 人の相部屋に案内された。
あさひは大浴場で風呂を済ませ、食堂で食事も済ませ、大部屋に行った。
あさひは憂鬱だった。
どうせまた一人ぼっちなんだろうなって。
相部屋でぼうっとしてたら、一人の女の子がみんなに声をかけた。
「ねえ、みんなですき焼きゲームみたいに輪になって座りませんか？」
自分と違ってとびきり明るい女の子だなと思った。
みんなお互いに初対面だが、その子が言うようにみんなで輪になることにした。
「さあ、順番に自己紹介。
名前、出身県、好きなアーティスト、自分の曲の紹介。
これをみんなで言い合いましょうよ。」
みんな途端に黙ってしまったのでその女の子から言うことになった。
「私はあいりという名前でデビューしようと思ってます。
出身県は千葉、尊敬する好きなアーティストは江利里子、エリーです。
私の作る曲は陽だまりみたいに暖かな曲を目指しています。
例えば落ち込んでいて心が凍っている人がいたら暖かな春風みたいな歌を歌ってその人の心の氷を溶かしてしまうようなそんな曲を歌いたいです。」

江利里子は通称エリーと言われていて、どの曲も優しく聴いているだけで暖かな気持ちになれる曲を歌うアーティストだった。

あさひはエリーは二番目に好きな女性シンガーソングライターだった。

あさひの好きな女性シンガーソングライターは…

順番があさひに回って来た。

「私はあさひという名前でデビューしようと思ってます。

出身地は埼玉、尊敬する好きなアーティストは鹿島みのり。

私の作る歌は悲しい歌ばかりです。

人生の痛みや悲しみを歌った歌です。

恋の歌も片思いの失恋ソングばかり。

誰かを元気づけようとかそんな考えはなくて。

ただ自分の苦しみを誰かにわかってもらいたくて曲を作ってます。」

「へえ、私とは全然違うなあ。

そうか、誰かに聴いてもらいたくて曲を作る人もいるんだ。

でもあさひさん、誰かに苦しさをわかって欲しいって歌っててそれ聴いて元気づけられる人もいるよ。

私より不幸な人がいるなんて思って。

私の歌では救えない人があさひさんの歌で救われることもあると思うよ。

そういう歌もこの世知辛い世の中に必要だよ。」

あいりがそう言って笑った。

なんだかあいりにそう言ってもらえて気が楽になった。

「さあ、自己紹介も終わったことだし、これからハンカチ落としでもして遊びましょう。」

この緊張した雰囲気の中でハンカチ落とし？

みんな面喰っていた。

でもその後、みんなぷっと噴出した。

あいりには周りのみんなを和ます独特の雰囲気が備わっていた。

そしてみんなでハンカチ落とし、フルーツバスケット、すき焼きゲームをした。

ゲームが終わる頃にはみんなが一つにまとまっているように思えた。

いわばみんなコンテストでは敵同士。

最初はみんな的に見えて怖かった。

でもこうやって自分の自己紹介をしたりゲームをしたりしているうちにそんなことも忘れて楽しんだ。

そして10時に寝ることになった。

あいりのお蔭で自分の過去の修学旅行の苦い思い出が拭い去られた。

寝る場所も偶然くじ引きであいりの横になった。

「あさひさん。

あなた恋と友情を同時に無くしたことある？」

あいりが突然そう言い出したのでびっくりした。

「私はあるの。

私の歌はそこが出発点。

ごめんね。

変なこと聴いて。

私たち作る曲も目指すアーティストも違うけどすごく根っこの部分が似ている気もしたの。

それにあさひさん、誰かを元気づけようなんて思っていないって言っていたけど違うと思った。

自分が気がついていないだけで誰かを救いたいって思って曲を作ってると思う。

じゃなきゃ、このコンテスト応募しないよ。

私明日のコンテストはあさひさんが一番強敵だと思う。

ごめんね、こんな話して。

お互い実力以上のものを出して頑張ろうね。」

「わ、私も。

恋と友情を無くして。

そこから曲が生まれたの。」

どうしてあさひはこんな初対面の女性にこんな大事なことを話したのだろう。

今まで心の奥底にしまい込んで誰にも打ち明けることはしなかったのに。

知り合って間もないのにこのあいりという不思議な女の子に対しての尊敬の念もあった。

千鶴を無くしてから誰にも心を許せなかった。

でもこのあいりにはすべて打ち明けてみようという気持ちになった。

でもその日はもう遅く、次の日のコンテストに差し支えるのでそのまま眠ることになった。

次の日のコンテストは朝 10 時から全部で 17 組の曲目が演奏されることになった。

奇しくもあさひはあいりの後だった。

あいりの歌は。

運命の人に巡り合えたという幸せ絶頂の歌だった。

歌声も優しくて明るくてくったくなくて。

あいりの暖かい人柄を表しているかのような歌い方だった。

負けた。

あさひは戦わずしてそう思った。

でも逆にこれで気が楽になった。

多分自分はいりには負けるだろう。

でもあいりという素晴らしい女性に出会えてそれでここへ来た甲斐はあったと思った。
あさひは自分の名前がコールされたけど不思議なほど緊張していなかった。
暗くて狭い自分の心の部屋で作った不気味な曲。
思えば人に歌って聞かせるのは生まれて初めて。
そんなことも忘れて無我夢中で自分の世界を歌い上げた。
こんな歌だった。

『ともろう』

私には一生友達なんてできないんじゃないか
私には一生彼氏なんてできないんじゃないか
そんな堂々巡り 今日心の中で

ピアノを弾いてみても
友達だったあの子との楽しい思い出が蘇る
どこにも逃げ道なんて 私にはない

どうして私だけ人並みの幸せが掴めないんだろう
どうして私だけこんなに辛いことばかり起こるのだろう
私はただ友達と一緒に笑い合いたいたけなのに
今日も夜が明けて私の心にだけやって来ないともろう

終わった途端、一瞬しーんとなったそして割れんばかりの拍手が沸き起こった。
あいりの時より拍手は多いのがわかった。

コンテストの結果は。
やはりあいりが優勝した。
あさひは審査委員特別賞を受賞した。
でもあさひは納得いった。
あいりの作る暖かい歌や歌声はこれからも日本中を優しさで包み込むことだろう。
あいりこそ、今の日本に求められているシンガーだと思った。
あさひは審査員特別賞がもらえるだけでも嬉しかった。
これでもう人前で自分の歌を披露することもないだろうと思って帰りかけたその時、パ
リッとしたスーツを着てメガネをかけた男性があさひを呼び止めた。
「あさひさん、ですね。
ちょっとお話があるので喫茶店でお話させていただいてもいいでしょうか？
こういう者です。」

男性は名刺を取り出した。

あさひは丁寧に名刺を受取る。

メリーゴーランドというプロダクション名が書かれていた。

あさひもよく知っている王手だ。

多くのバンドやシンガーソングライターがそこに所属していた。

喫茶店でコーヒーを注文した二人は向かい合って座った。

「あさひさん。

もちろんプロでやっていく気持ちはありますね。

さっきの歌を聴いていて、実は私は今回の出場者の中であさひさんの歌が一番感動したんです。

あさひさんがてっきり優勝すると思ってました。

ここだけの話あいりさんとあさひさんはすごい接戦だったらしいです。」

あさひはびっくりした。

出場者の中で一番感動した？

あの素晴らしいあいりと自分が接戦？

「あさひさん、他にも曲はありますか？

是非他に曲があれば私に預けてください。

そして吟味した上でうちのプロダクションからデビューしていただきたいんです。」

あさひは実家に帰り自分が暗黒の青春時代に作った曲の入っているカセットを取り出した。

そしてメリーゴーランドに渡した。

結果は。

是非メリーゴーランドに所属して欲しいとのことだった。

こうしてあさひという女性シンガーソングライターが生まれた。

あいりは年は1年あさひの方が上だが同世代のライバルということになった。

あさひはやがてデビューすることになった。

あいりも同期デビューした。

あいりはデビューからすぐに大人気になり、瞬く間に大スターになった。

あさひは「さみしい同盟」という曲でデビューしたが鳴かず飛ばずだった。

「さみしい同盟」は友情の歌だった。

憧れの鹿島みのりのデビュー曲が友情の歌だったからそれを真似たかった。

でもその当時あさひには友情の歌を作るにしても友達が一人もいなかった。

そこでもし友達がいたらこんな風に付き合いたかったという妄想で作ることにした。

『さみしい同盟』

あなたと私はさみしい同盟

人生の中で最悪な時期が一緒だ
同じ日に告白したよね
二人とも失恋したよね

私たちは学校で恋の居残り勉強
教室で一緒に泣いたよね

どんなに大人になっても忘れないよ
二人で仲良く泣いた教室の思い出

千鶴とこんな風に付き合いたかった。
もしあの時お互いに失恋していたら…
この歌みたいに一緒に悲しみを共有していただろう。
恋は失ったがより強い友情が生まれて。
しかしこの歌は全く売れなかった。

でもあさひに転機が訪れた。
大阪の人気 FM 曲で「とうもろう」がヘビーローテーションになったのだ。
しかも 5 月のヘビーローテーションだ。
ヘビーローテーションとは 1 ヶ月間、放送局の各番組で一度はかかるようになる。
ヘビーリスナーなら曲を覚えてしまうくらいに。
5 月は毎年初夏を感じるさわやかな希望に満ちた曲が先行される場合が多いが、学校や
職場で 5 月病になる人もいるということで「とうもろう」みたいな沁みる曲が選ばれた。

『とうもろう』
私には一生友達なんてできないんじゃないか
私には一生彼氏なんてできないんじゃないか
そんな堂々巡り 今日心の中で

ピアノを弾いてみても
友達だったあの子との楽しい思い出が蘇る
どこにも逃げ道なんて 私にはない

どうして私だけ人並みの幸せが掴めないんだろう
どうして私だけこんなに辛いことばかり起こるのだろう
私はただ友達と一緒に笑い合いたいただけなのに

今日も夜が明けて私の心にだけやって来ないとうもろう

オンエアされてからすごい反響だった。

ヘビーローテーションナンバーはリクエストしていなくてもオンエアされるのにすごいリクエスト数で、毎週日曜日に発表されるリクエストオンエアチャートでもついに3位になった。

これはヘビーローテーションナンバーでは珍しいこと。

シングル CD も 70 万枚売れた。

あさひが嬉しかったのは CD が売れたことだけじゃない。

事務所に届くファンレターがすごく嬉しかった。

「私も学校で友達ができません。

でもこの曲を聴いて私だけじゃないんだって元気づけられました。」

「私はクラスで好きな男がいますが、自分に自信がなくて告白できません。

そんなダメな自分が嫌いでした。

でもこの曲のおかげでちょっとは自分のこと好きになろうかなって思ってます。」

「私は4月から新しい職場に行くことになりましたが、今5月病です。

でもこの曲をカセットウォークマンで聴いて通勤すると、不思議とパワーをもらいます。」

「私はもう自分のことが嫌いで嫌いで。

誰と会うのも嫌いで嫌いで。

でも嫌な学校生活も家に帰ったらこの曲が慰めてくれるって思ったら毎日頑張れています。」

まるで思春期の自分、今の自分。

こんなにも自分が嫌いで付き合いが嫌いで自分に自信のない人がいっぱいいるんだ。

私なんかの歌に励まされてるんだ。

そう思うと使命感が生まれた。

そうだ。

私の内面をもっと打ち明けて歌を作ろう。

私の仲間はこんなにいっぱいいるんだ。

そう思ってあさひは自分のことをすべて打ち明けるような曲を作ることにした。

失恋の痛手で恋ができなくなっている人も多かった。

そこでその人たちの力にはなれないかなと思った。

自分の中で一番の心の傷。

それは大好きな人とフォークダンスを踊ってもらえないことだった。

そしてあさひが変だと言われたこと。

ブス、嫌いなんて言われたこと。

これを歌にしようと思った。

『フォークダンス』

一生恋することさえ許されない人もいるのに
どうしてこんなダンスがあるのだろう
男の子、女の子、手を繋いで
輪になって踊る

くるりくるりくるりくるり
今日も私は記憶の中で踊る
くるりくるりくるりくるり
ぎこちなく手を繋ごうと思っても
誰も手を繋いでくれない

大好きなあなたと踊れる瞬間が訪れる
でもあなたは私の手を振り払った

この曲はミリオンセラーになった。
そして莫大な量のファンレターが送られてきた。
全国にフォークダンスで手を繋いでもらえない人がいたのだ。
失恋の痛手に苦しんで恋ができなくなっている人もいたのだ。
やがてあさひはラジオ番組を持つことになった。
あさひは一切テレビに出ない作戦を取った。
あいりも一切テレビに出ない。
あさひの曲をヒットさせてくれた FM 局での 1 時間番組。
あさひは小学校の頃放送委員をしていたこともあり内気な性格の割には放送慣れしていた。
家で一度自分一人で予行練習をする。
そうすると本番うまくいった。
明るい放送ではないが割合流暢に話すことができた。
あさひの放送はこんな感じだった。
リスナーからの手紙は FM 局開局以来の多さだった。
「初めまして、あさひさん。
ペンネーム、サンドベールです。
私はクラスの男の子に嫌われていて、口も聞いてもらえません。
毎日毎日学校に行くのが嫌で嫌で。
でもあさひさんの『フォークダンス』を聴いて、心が軽くなりました。」

このような手紙ばかりいっぱいくる。

あさひは。

「私も男の子からはバイキン、女の子からは野蛮人なんて言われて両方とも嫌われていました。

昔、私は体操服も制服もドロドロに汚して汚くしていたんですね。

それに女の子に意地悪なことを言われるとすぐかっとなって胸ぐら掴んだりしてました。

今はその反動ですごく綺麗好きになったし、嫌なこと言われてもぐっところえるようになったけど。

でも小学校の頃に言われたことって今でも一生傷みたいになっていますね。

私はでもこう思います。

弱い人の気持ちがわかって良かったって。

目の前に傷ついている人がいたら救うことができるようになったし。

もし自分がクラスの人気者でみんなから好かれていたら、今の自分がいなかったし。

ファンレターをいただく方々も私の大切な友達です。

私は思春期友達を持つことができなかったけど、今こうしてこんなにいっぱいの友達ができて嬉しいです。

サンドベールさんも人の痛みのわかる女性ですよ。

だから自信を持って学校生活を送ってください。

ぐっ和我慢して生きていったらいつか同じように傷ついている人を救うことができると思います。

その方が値打ちのある人生ですよ。」

決して明るい放送ではないけど、みんなあさひの言葉に救いを求めている。

あさひは気になることがあった。

あいりだ。

あいりとは結局あのコンテストの前の晩、布団が隣通しになって以来話をしていなかった。

あいりといつか話をしたいと思っていた。

あさひもあいりもテレビに出ないので接点もない。

あさひはまだコンサートツアーをしていなかったけどあいりは美しい衣装に身をつつみ豪華で芸術的なライブを行っていた。

あいりはコンサートや雑誌の取材で忙しそうだった。

そんなあいりがあさひのラジオ番組にゲストで来ることになった。

あいりとはあのコンテストの前日初めて会ったはずなのに何故かずっと前からの知り合いみたいに近く思えた。

それがずっと不思議だった。

「今日のゲストはすごい方です。

今や日本を代表するアーティスト、あいりさんです。

あいりさんとは一緒のコンテストに出場したことがあるんですよね。」

「前日に出演メンバーたちが 10 人部屋でフルーツバスケットとかハンカチ落とししたんだよね。

楽しかったね。」

「あれはあいりさんがそうしようって言うてくれて。

お蔭様で緊張がほぐれました。

あの時はありがとうございました、あいりさん。」

「それがね、あの時多分あのメンバーの中で一番緊張していたのが私だと思う。

自分の気を紛らわすためにあんなアイデア出したんですよ。

私はすごい自意識が強くてあがり症なんですよ。

今でもどのコンサートの前でも本番前楽屋の鏡の前で泣いてるもの。

思春期の頃の暗くて一人ぼっちの自分を思い出して。

あんな暗かった私がこんな煌びやかな衣装を着てコンサートしてもいいものだろうか
って気持ちになって。」

「あがり症なものびっくりしましたが、思春期の頃に一人ぼっちだったなんて。

それもびっくりしました。」

「私は友達を作るのが苦手で。

中学 3 年になるまで友達がいませんでした。

小さい頃の女の子って本音をそのまま言うし、意地悪でしょ？

いつでもどこでも女の子の意地の悪い言葉に傷つけられて。

こんなに傷つくならいっそのこと一人でいた方が気が楽だって思ったの。

でも中学校 3 年生の時に、やっと友達と言える子ができたの。

それまで教室の片隅、友達同士で仲良く笑い合っている女の子を見て、すごく羨ましかったの。

私にも友達ができたらなあっていつも思っていて。

私に友達ができたらどんなにか楽しいだろうってね。

その友達ができた時、本当に幸せでね。

それまでの灰色の学校生活がバラ色に輝いていて。

人生でもあんなに幸せだったことなかった。

そして自分の殻から出られて明るくなったせいか、彼氏も同時期にできてね。

友達がいておまけに彼氏もできて。

3 年の 1 学期は生涯忘れられない幸せな日々だったな。

でもそんな幸せな日々もそう続かなかった。

ある日、偶然忘れ物をして教室に戻ったら、その友達と彼氏がキスしてたの。

彼氏が浮気して、その相手が私の友達だったの。

ひどいじゃないって言ったらその友達はどう言ったの。

『彼と **SEX** できないってこぼんだの、あいりじゃない!!

私は彼と **SEX** できるから付き合うことになったの。

こんなのひどくもなんともないじゃない。

SEX できないあいりと彼が付き合えないだけのこと。

なんでそんなこともできないの?』

そうなの。

恥ずかしいけど私は中学で性を知ることには抵抗があって。

すごく純情だったの。

今思えばその友達はすごくませてたな。

私は、彼氏に **SEX** しようって言われた時、断っていたの。

私は恋と友情を同時に無くして、それから一人ぼっちの思春期だったな。

あさひさんと一緒よ。

あさひさんの恋と友情を無くした話、雑誌で読ませてもらって。

やっぱりあさひさんと私は似ているなって思っていました。」

「そうだったんですか？」

そんな悲しい思い出が。」

「あさひさんの放送毎週聞かせていただいています、私たち同じこと考えていますね。

今日の前に泣いている人がいたらぎゅっと大丈夫だよって抱きしめてあげるような音楽。

あさひさんは一緒に涙を流し、私は笑わせる。

それが違うだけ。

私は友達なんてできそうもないなって思っていたけどファン以外の友達はあさひさんだけだなって。

私はあの布団で話した時からあさひさんの友達ですよ。」

そう言ってあいりはにこっと笑った。

「友達？」

ずっと話してなかったのにですか？」

「友達って一緒に食事に行ったり、旅行に行ったりベタベタしていても隙間が埋まるものじゃないの。

もっと深いところで心と心が繋がっていること。

使命感が似ていたり、価値観が似ていたり。

私はあの布団が隣同士になった時からあさひさんは友達だと思っていたよ。

どっちみち私はあの時、あさひさんの隣になりたかったし。

隣じゃなかったら話しかけに行っていたかな。

あの自己紹介の時から私の友達だって思っていたんですよ。

お互い忙しくて会えることもそうないと思いますがあさひさんは私にとって大切な大切な友達です。

今日は実はどうしてもあさひさんと話したくて、この番組のゲストにしてもらったんです。

これからどんな手を使ってもあさひさんと話したくなったらあさひさんの仕事を入れますよ。」

あさひはびっくりした。

あんなに憧れていたあいりが自分と友達になって欲しかったなんて。

あさひも実を言うとあの布団が隣同士になって以来、あいりと親しくなりたいと思っていたのだ。

あさひとあいりは常にベタベタした間になることはないだろう。

でもこんな風に偶然一緒にの仕事になることでのみ話せる友達になれそうだった。

思春期友達と笑い合える時間は短かったけど。

でも思春期が暗かった者同士、こうして繋がれる幸せを噛みしめた。

しかもあさひが憧れてやまないあいりと。

あさひはやっと自分の青春がやってくる気がした。

あさひの青春の訪れはこれだけじゃなかった。

こんな転機が訪れる。

月曜日の9時のドラマ主題歌の依頼があったのだ。

主演は今一番の人気俳優、藤沢幸助だ。

そのストーリーがこんな風だったのだ。

小学校の時、初恋の相手にひどいことを言われてふられ、それ以来心を閉ざしてしまい、誰も好きになれない女の子芽衣。

そんな芽衣に一目惚れする栄治。

栄治の優しさで芽衣の心の傷を治していくというストーリー。

そのヒロインはまるであさひそのものだった。

芽衣目線のラブソングにして欲しいとの依頼。

しかし条件があった。

幸助がそのラブソングが果たして本当にいいか吟味することになった。

主題歌を幸助と二人で作って欲しいという脚本家からの依頼があった。

あさひは男性恐怖症の気がある。

この依頼は正直気乗りがしなかった。

今日はその初めての打ち合わせの日。

脚本家の先生があさひをレコーディングスタジオに連れて行った。
そしてそこに先に来ていた藤沢幸助がいた。
あさひは幸助に挨拶をした。
幸助はぶっきらぼうに手を差し伸べた。
握手を求めているみたいだった。
あさひはドキドキしながら握手した。
幸助は思いのほか強く握り返した。
ますますドキドキするあさひ。
幸助は当時、売れっ子俳優で次々と映画やドラマに出演していた。
年はあさひより一年上の 23 歳だった。
そんなすごい売れっ子でハンサムの幸助と一緒に仕事ができるなんて信じられなかった。
あさひは元々一番好きな俳優が幸助だった。
そんな憧れの幸助とこれから一緒に曲を作っていくなんて夢のようだった。
あさひはまず持ってきた曲を歌って聴かせた。
楽譜を脚本家の山内先生と幸助に渡した。

『心の雪』

あなたにブスだって言われた
あなたに嫌いだって言われた
あなたに変だって言われた

あれ以来私は恋ができなかった
あれ以来男の子が苦手になった

私の心はいつまで経っても冬のままで
決して私の心に桜は咲きはしない

ここまで歌った時だ。

「やめ!!

やめ!!」

幸助が言った。

「そんな湿っぽい歌月曜日から聴きたいか？

もっとこう心がウキウキするような曲を作れないのか、君は。」

大好きな幸助にこんなことを言われてショックだった。

あさひはあさひなりに心の奥底にある小学校 6 年生の時の苦い恋の思い出を引っ張り

出して歌ったのだ。

自分の身を最大限に削って。

あさひはどうしていいのかわからなくなり号泣してしまった。

幸助はびっくりした。

「ごめん、ごめん。

俺が悪かった。

せっかく作ってきてくれたのに。」

幸助は心底悪いことをしたと思い詫びた。

でもあさひは一向に泣き止まない。

幸助は言った。

「すみませんが、山内さん。

あさひさんと二人っきりにしていただけないでしょうか？」

幸助とあさひは二人っきりになった。

「ごめん。

俺、実は女の子が大の苦手で。

いつも相手役の女の子を泣かしてしまうんだ。

思ったこと全部口にしちゃうから。

女の子に優しくするってことが苦手なんだ。

だから実はこの役、すごく苦手な役なんだ。

だからそれに対しての苛立ちもあって。

実は今仕事がうまく行ってなくて。

女の子に優しくするってどんな風にすればいいのか迷っていて。

女の子をいたわるセリフを言っているけど全然心がこもってないなんて言われて。

むしゃくしゃしてて、あさひさんに当たってしまっ。

ごめんね。

すごくいい歌だとは思うよ。

だけどやっぱりこのストーリーには合わないかな。

あさひさんの言葉を借りるとしたら、桜が咲かないじゃなくて桜が満開の歌を歌ったら
どうかなって思ってね。

今、思ったけど、俺たちお互いを知らな過ぎるよなあ。

これからお互いの恋の話をし合わないか？

俺から話す。

全部話すよ。

俺は実は恋愛の経験は2回だけどいづれも自分から付き合っ

て欲しいって言って、付き
合ったけど、彼女から嫌になって別れを告げられたんだ。

俺はすごい毒舌なんだ。

それに好き嫌いも激しくて。

人間嫌いかも知れない。

だから彼女と付き合っても人の悪口ばかりいうものだから女の子の方も嫌気がさすみたい。

いつもそれでふられている。

職場でもトラブルが絶えなくて。

それに好きな女の子には素直になれないんだ。

好きになった女の子に冷たくしたりきついこと言ったりしてしまう。

小学校から全然成長してないんだよ。

あさひさんは？

あさひさんのこと俺、知っておきたい。

俺たちお互いのことを知っておかないといい作品は作れないと思うんだ。

やっぱりこのストーリーにぴったり合った主題歌であって欲しいし。

主題歌がこのストーリーを盛り上げて欲しいし。

俺、このストーリー今までで一番好きなんだ。

それになんで俺、あさひさんと一緒に主題歌を作ることになったと思う？

俺がこの脚本を読んでこれはあさひさん以外に考えられないって思ったんだ。

だから俺と一緒に主題歌を書き下ろす作業をしたいと思った。

俺、実はあさひさんの大ファンなんだ。」

あさひはそれまで泣いていたけどこれで泣き止んだ。

あさひはあっけにとられて口をぽかーんとあけてしまった。

「私の、ファン？」

「ファーストアルバムもシングル3枚も持っています。

雑誌の切り抜きも集めているし。

ラジオのオンエアも大阪の友達に頼んでカセットに落としてもらっているし。

雑誌では恋と友情を一緒に無くした話はしていたけど初恋の話はしてなかったね。

あさひさんの初恋の話が聴きたい。

後、フォークダンスの誕生秘話も。」

あさひはフォークダンスは初恋をなくしたから生まれたと話した。

憧れの幸助に自分の心の奥底にあったフォークダンスと小学校の卒業式の話をお互いにかけることになるなんて夢にも思っていなかった。

こうしてあさひと幸助は深くお互いを知ることになったのだ。

仕事が終わってから幸助とレストランへ行ったり、喫茶店に行ったりしてお互いのことを包み隠さず話した。

あさひは小学校の頃、女の子からは野蛮人、男の子からはバイキンと言われていた話もした。

それを幸助に話したら。

「俺がその場にいたら、女の子には嫌味を言ってやるし、男の子にはげんこつをお見舞いしてやる!!」

と言ってくれた。

幸助は歌を作っていく上では、毒舌で時にはあさひにきついことを言ったけど、あさひの過去の傷は優しくケアしてくれた。

幸助と話すことにより少しずつ過去の恋の傷がいていった。

そして幸助もまたあさひと話せば話すほど優しい男になっていき、それはドラマにも顕著に表れるようになっていった。

あさひと幸助は相乗効果でレベルアップしていった。

ある日、幸助からこんな誘いを受ける。

夜の遊園地に行かないかと誘われる。

あさひは耳を疑った。

今まではドラマ主題歌を作るという目的でお互いのことを話し合うということで喫茶店やレストランに行っていた。

それ以外で外で会ったことなどなかったのだ。

これってデートなんだろうか？

あさひは聴きたかったけど聴けなかった。

あさひは目いっぱいお洒落してデートに来た。

流行の紺のブレザーに **CELINE** のブランドスカーフを巻いた。

あさひはスタイリストがつくようになってからその影響でお洒落にも敏感になりファッションセンスが磨かれた。

待ち合わせの場所にはもう幸助が来ていた。

幸助はさすがにトレندي俳優。

幸助も紺のブレザーをカッコよく着こなしていた。

いつもテレビドラマで観ていたあのカッコいいトレندي俳優藤沢幸助がこうして私を待ってるんだと思うとこみあげてくるものがあった。

そして幸助とジェットコースターや急流すべり、メリーゴーランドに乗った。

最後に観覧車に乗ることにした。

密室で藤沢幸助と二人っきりになり、何を話していいかわからないあさひ。

幸助は、高いところが大好きみたいで、はしゃいでいる。

幸助とあさひは向い合って座っていた。

「あさひさんのところに行ったら、傾いてスリル満点になるかな？

てっぺんにきたらあさひさんのところへ行くよ。」

こんなドキドキすることを言うのだ。

てっぺんになった。

幸助はあさひの隣に座る。

一瞬ガタって音がしてわずかに二人のいる席の方に傾いた。

「キャッ!!」

あさひは幸助がこっちへ来たのと傾いたので心臓がすごい音を立てた。

そして…

その瞬間幸助があさひの唇にキスをした。

あさひは…

あまりのことにびっくりする。

人生で初めてのキスが、藤沢幸助だなんて。

あさひはずっと幸助が好きだった。

元々大ファンだけど、幸助と腹を割って話すたびに、幸助という人を深く知るたびに、
どんどん好きになっていく。

でも自分とは違う世界の人だと思っていて、両想いになることなんて考えてもいなかった。

そんな幸助があさひにキスをしたのだ。

あまりのことにあさひは咄嗟にこんな言葉を発してしまった。

「わ、私、ずっと幸助さんのことが好きでした。」

幸助は少し困った顔をしていた。

二人の間に気まずい雰囲気漂う。

そうこうしているうちに観覧車は地上に降りた。

あさひはキスされたことと、自分が告白してしまったことが恥ずかしくなり、その場を
去って行った。

遊園地からも去って行った。

あさひはこう思った。

もうこの恋は終わりだ。

あの気まずい雰囲気は幸助さんが私のこと好きじゃないから。

きっと幸助さんは一瞬の気の迷いであんなことしたんだ。

あさひは涙が止まらなくなった。

どうしよう。

もう一緒に仕事なんてできない。

せっかく作りかけていた主題歌も完成しそうもない。

ふと気分転換にテレビを付けたら、ワイドショー番組がかかっていた。

「今 OL さんに一番人気のトレンドィ俳優藤沢幸助さんですが、大ニュースが入りました。

なんと 4 月クールからのドラマ「大恋愛」の主題歌を担当するあさひさんと熱愛報道です。

二人が先ほど、遊園地でデートしていたのをスクープいたしました。

尚、藤沢さんはこの「大恋愛」の主演です。

このことについて藤沢さんは今から記者会見いたします。

あっ、今から記者会見が始まるみたいです。」

急にマイクが何本もある記者会見室が映った。

幸助がマイクの前に座った。

隣には芽衣役の田里歩が座った。

幸助が挨拶する。

「今日は4月から始まるドラマ『大恋愛』の記者会見です。

それと最後に僕から重大発表があります。

先にドラマについての質問の方をお願いします。」

重大発表で何を話すのか、あさひはビクビクしていた。

みんなの前で私は大失恋するのだろうか？

でも聴かずにはいられない。

順番に「大恋愛」についての質問がされた。

幸助は丁寧に答えていく。

そして最後にこんな質問があった。

「シンガーソングライターあさひさんとはどういったご関係ですか？」

あさひは死にたいくらいに恥ずかしかった。

「あさひさんとは…」

いいお付き合いをさせていただいています。

お互いに尊重し合っていていい関係を築いてきました。」

「それはお二人が付き合っていると言っていいんでしょうか？」

「そうです。

僕とあさひさんは付き合っています。」

あさひは何が起こったかわからなかった。

あのキスも私のことが好きだったから？

私と幸助さんが付き合っている？

「最後にあさひさんのことはお好きですか？」

「僕はあさひさんのことが大好きです。」

こうして幸助とあさひは付き合うことになった。

人生初の彼氏が 트렌ディ俳優藤沢幸助になるだなんてこんな幸せなことがあるだろうか？

小学校の頃から男の子からバイキンだなんて言われていたあさひが。

初恋の人にブスだとか変だとか嫌いだとか言われたあさひが。

中学校・高校と一緒にの班になったら最低だと言われていたあさひが。

そんなある日、一通の定形外の封筒があさひの元に届けられた。

差出人は峠千鶴だった。

あさひは急いで封を切る。

ハガキが入っていた。

往復ハガキだった。

同窓会だ。

そして手紙が一緒に入っていた。

こんな内容だった。

「お元気でしたか？」

この度、中学校 3 年生の時のクラス B 組のクラス会の幹事になりました。

是非、あさひも来てください。

あさひほど有名人になった人はいないのでみんな喜ぶと思いますよ。

地元ではみんなあさひの活躍を喜んでるんですよ。

私もあさひの活躍を喜んでました。

学生の頃は、あさひに悪いことをしましたね。

私があの時、もう少し大人だったら、あさひとは今でも親友だったかも知れません。

虫が良すぎますが、私たちもう一度友達になれないでしょうか？

あの時なぜあんなったか説明もしたいです。

あさひと会いたいです。

もしあさひが私ともう一度友達になりたいという意思があるのなら、3 月 29 日 10 時きさらぎ中学校の校門前に来てください。

いつもあの校門を二人で通ったよね。

あさひが来てくれることを祈っています。」

あさひは 3 月 29 日 10 時きさらぎ中学校の前に行った。

千鶴はあの頃より更に綺麗になってそこにいた。

二人は校庭のベンチに座った。

あの頃は校庭は校舎と校舎の間にあり、窮屈そうだったけど、今はだだっ広い広場の中に校庭があった。

「遊園地でお互いに告白しようって言ってその後、どうなったか言うわ。

実は私が大好きだったかずはあさひのことが好きだったのよ。

というか、かずは最初からあさひとお近づきになりたいから勘ちゃんに頼んであの時、声をかけに行っただけなのよ。

かずはあんまり美しいピアノの演奏だったから音楽室によく行っていたらしい。

そこでピアノを弾いてるあさひに一目惚れして。

ずっと仲良くなりたいって思ってた。

そこでじれったく思った勘ちゃんがあさひに声をかけたの。

私はそれを知って悔しくて悔しくて。

あさひの方をかずは好きだなんて。

しかも最初からそのために私たちに近づいたなんて。

私はかずが好き過ぎて狂っていたのかも知れない。

だから逆にあさひの好きな勘ちゃんを取ってやろうと思ったの。

でも勘ちゃんも私とは付き合いたくないって言うの。

それでもしつこく勘ちゃんにベタベタしていたけど。

あれもあさひに見せつけてやりたくってわざとしてたの。

勘ちゃんは実は最初からあさひが好きだったのよ。

でも勘ちゃんは友達を大切にする人だからかずに譲ったのよ。

それも打ち明けてくれた。

あの時、かずも勘ちゃんもあさひの方が好きだったのよ。

だから私は余計に腹が立って。

どうしてあさひばかりもてるんだらうって悔しくてね。

今となったらなんて子供だったんだらうって思うけどね。

あさひと友達の縁を切ったことずっと後悔してた。

本当はずっと仲直りしたかった。

あさひがデビューしてからその思いはもっと強くなった。

あさひの曲、悲しい曲ばかりで。

私があさひから青春を奪ったんだって思ってね。

ずっと罪を感じていた。

あさひ、こんなひどいことをした私だけどもう一度友達になってくれるかな？

それにクラス会に来てね。」

「千鶴…

私、千鶴とこんな風に会えていること自体すごく嬉しいわ。

もう過去のことなんてどうでもいい。

千鶴とずっと仲直りしたかった。

だから罪に思わないで。

こんな私だけどこれから仲良くしてくれる？」

千鶴とあさひは、手を取り合って、友達の誓いを立てた。

それからあさひは千鶴と時々会って話をした。

そしてクラス会に行った。

このクラスには初恋の透君もいた。

3年の時に一緒にクラスだった。

本来だと大好きだった透君と一緒にクラスになれて薔薇色の中学校 3 年生だったはず

だが、千鶴と仲が悪くなったことが辛くて恋どころじゃなかったのだ。

偶然クラス会で透君と隣の席になった。

やっぱり初恋の人と隣同士になるのは緊張する。

しかも透君はますますかっこ良くなっているから。

「あさひさん、僕、あさひさんの CD 全部持ってるよ。」

透がそんなことを言ってきた。

「えーっ!!

透君が私の CD を!!」

「僕あさひさんのファンだもの。

デビュー当初からファンだったよ。」

「なんか照れる。」

あさひは真っ赤になって俯いた。

「昔、ひどいこと言ったよな。

ごめんな。

あれ全部、本心じゃないんだ。

クラスの奴にからかわれてどうしたらいいかわからなくなって。

咄嗟に思ってもいないこと言ってしまっ。

本当はあさひさんに恋してたんだ。

ずっとあさひさんのこと好きで。

あさひさんは僕の初恋の人だったんだ。」

「は・初恋?

私のこと嫌いなんじゃなかったの?」

「嫌いだなんて本心じゃなかったよ。

ずっと好きで好きでしょうがなかったよ。」

あさひは何が起きたかわからなかった。

あんなに大好きだった透君が初恋だった透君が、あさひのことを好きだったなんて。

しかも初恋だったなんて。

「僕に今彼女がいなかったらあさひさんと付き合いたいぐらいだよ。

でもあさひさんは僕なんて足元にも及ばないすごい美男子と付き合ってるもん。」

透君はからかった。

「さあ、みんな今をときめくシンガーソングライターあさひさんに歌ってもらうコーナーがやってきました。

その後、サインと握手会もしましょう!!」

昔から仕切り屋だった竹内君が仕切った。

あさひは仕方なしに、用意されたピアノでデビュー曲と、ヒット曲を歌った。

その後、サインと握手会もした。

そしてみんながあさひと話したがった。
芸能人で誰が悪い奴で誰が良い奴か。
隠れたスキャンダルはないか。
女優さんや俳優さんの裏話はないか。
もちろん、知っていることもあるが、そんなこと言えるわけないので、お茶を濁しておいた。
こうしてあさひは暗かった思春期の思い出が塗り替えられ、ここから新しい青春が始まった。
あさひの思春期と今がこんな風変わった。
初恋の人の初恋だった。
失恋した人が実はあさひのことが好きだった。
失った友情が蘇った
雲の上の存在だったアーティストと友達になった。
そして雲の上の存在だった人気俳優があさひの彼氏になった。
あさひはこれ以上ないくらいに幸せになった。

あさひは月曜日 9 時のドラマ「大恋愛」の主題歌を書き下ろした。

『雪溶け』

永遠に好きだと言われる人なんて現れないと思ってた
永遠にキスをしてくれる人なんて現れないと思ってた

冷たい氷の上を裸足で歩き
雪割草をさがしてた

あなたはまるで童話の中の王子様みたいに
好きとキスをくれたのよ

あなたはまるで童話の中の王子様みたいに
恋人になってくれたのよ

大失恋の後の大恋愛
あなたは私の心の中の雪を溶かした

これはあさひにとって一番の自信作だった。
ファンのみんなもそう思ってくれると。

でも結果は。

オリコンランキングも今までは1位だったのに、最上位で9位。

売り上げも30万枚と少なかった。

この曲を出してから、いや正確に言うと幸助と付き合ってからこんなファンレターばかり届いた。

「裏切られた気持ちです。

トレンドィ俳優と付き合うなんて。

あさひさんも普通の女性だったんですね。」

「私は小学校の頃、バイキンとか野蛮人とか言われて、コンプレックスの塊だったあさひさんが好きだったんです。

でも今はトレンドィ俳優と付き合うくらいにモテモテになって。

もはや私の大好きなあさひさんはいません。

「今まで私があさひさんにつぎ込んだお金を返して欲しいです。

なんですかあの『雪解け』は。

あんなひどい曲しか作れなくなったんですね。」

「あさひさんはもうシンガーソングライターでやっていけません。

トレンドィ俳優と付き合う女の歌なんて聴きたくありません。

いっそのこと仕事を辞めてトレンドィ俳優さんの奥さんにでもなってください。」

みんな怒りのファンレターばかりだった。

あさひの苦しみはここから始まった。

さあ、曲を作ろうと思い机に向かう。

あさひの小学校時代を思い出す。

女の子には野蛮人と言われ男の子にはバイキンと言われる。

初恋の人にも嫌い、変わっている、ブスと言われる。

以前はその時の悲しい気持ちを思い出し絞り出して、そこから曲を作っていた。

でも、思い出してしまう。

「嫌いだなんて本心じゃなかったよ。

ずっと好きで好きでしょうがなかったよ。」

透君が言った言葉。

だめだ。

あの暗い青春の苦い味を思い出せない。

コンプレックスの塊だった自分の苦しみを思い起こすことができないのだ。

この一言であさひの中のコンプレックスがなくなってしまったのだ。

気分転換に友人を失った苦しみを歌にしようとした。

「ずっと罪を感じていた。

あさひ、こんなひどいことをした私だけでもう一度友達になってくれるかな？」

今度は千鶴の声が浮かんでくる。

千鶴は今やすごく仲良しの友達だ。

友情を失った苦しみもなくなっていた。

バン!!

あさひはピアノに八つ当たりする。

小学校の頃に男の子や女の子に言われたひどい言葉。

初恋の相手に言われたひどい言葉。

中学の時、唯一の友に言われたひどい言葉。

全部、消えてしまっている。

これはあさひという一人のシンガーの死を意味する。

あさひワールドを作っていた、コンプレックスや苦い思い出が音を立てて壊れてしまったのだ。

それに輪をかけて、今幸助という誰もが羨むトレンドィ俳優との恋愛中なので余計にあのみじめな曲が作れない。

幸助との恋愛がうまくいけばうまくいくほど歌が作れないのだ。

幸助と付き合ってから「雪溶け」しか作っていない。

曲が作れなくなり半年がたった。

あまり曲が作れないのでついにレコード会社から呼び出しをくらった。

レコード会社の人は幸助と別れるように言った。

あさひはこれを断った。

あの頃のあさひには幸助がすべてで、幸助に対して恋する気持ち以外に何も考えられなくなった。

あさひは次から次へと幸助への恋心を歌にして曲を作ることにした。

これは悲惨だったあさひワールドの崩壊を意味した。

このアルバムは全然売れなかった。

こういった両想いの歌を作らせたならあいいには到底かなわなかったからでもある。

ファンレターも激減し、来たと思ったらアルバムを批判したものばかりだった。

ファンクラブの会員の数も減った。

あさひは仕事に身が入らなくなる。

幸助とデートばかりするようになる。

もうどんな歌を作ったらいいのかさっぱりわからない。

事務所から解雇される寸前まで来ていた。

そんな中、幸助とあまり会えなくなってきた。

幸助が NHK の大河ドラマの主演になったからだ。

これは1年間拘束がすごかった。

1週間に1度逢えた方がいい方だった。

そしてある日、すごくショックなニュースを聞く。

ワイドショーを観ていたら、こんなニュースが流れた。

「藤沢幸助さんが女優の児玉みのりさんとこのところデート現場を多く目撃されています。」

児玉みのりとは大河で妻の役をしている人だった。

あさひはすぐ幸助を呼んで、この訳を説明させた。

あさひのマンションに来た幸助はこう言った。

「大河はよっぽど相手役との意思疎通ができてないといけないんだ。

あの「大恋愛」の時の僕とあさひみたいに。

だからお互いのことを話している。」

「そんな!!

私の時みたいに幸助君、みのりさんのこと好きになったりしない？」

「大丈夫、大丈夫、俺たちは仕事だって割り切ってるから。」

幸助の言葉を信じるしかなかった。

そんな折、レコード会社から依頼がきた。

うまくいっていない男女の曲を作って欲しいとのこと。

それができなければクビだそう。

あさひは自分にできるすべての力を振り絞って曲を作ることにした。

「嫌いになるかも」

あなたと私 会える日が減っていき

あなたと彼女 会う日が増えていく

たまにあっても愚痴ばかり

他の誰かの悪口ばかり

もういい加減うんざりしてきたわ

もういい加減終わりにしたいわ

もういい加減信じられなくなり

もういい加減嫌いになるかも

これは全然本心じゃなかった。

こんなひどい歌を作っても幸助とあさひの絆は強いと信じていた。

こんなことで二人の愛は壊れないと。

シングル「嫌いになるかも」が発売された2日後。

ワイドショーは二人のビッグカップルの破局を報道した。

「藤沢幸助とあさひ破局」

「藤沢幸助と児玉みのり熱愛」

訳を幸助に電話で聴いた。

「みのりはキラキラしていたんだ。

仕事に取り組む姿勢が一生懸命で。

出会ったことのあさひに似ていてキラキラしていた。

最近のあさひ、仕事に身が入っていないみたいで、どんどん俺の心からあさひが遠くなっていった。

あさひからキラキラが消えたんだ。

でもなんとかやっていこうと思っていたんだ。

でも「嫌いになるかも」を出しただろう。

これで俺はもう終わりだと思った。

俺、このシングル聴いて一晩中泣いたんだ。

そしてその泣き明かした晩にあさひは俺の心から完全に消えてしまった。

もう終わりにしよう。

あさひは俺がいたら、いい歌作れないよ。」

「そんな。

終わりだなんて!!

あれ本心なんかじゃなかったの。

あんな歌でも作らなきゃ、私クビになるところだったの!!

だから苦肉の策で。

あれ本心なんかじゃ。」

あさひは泣き崩れながら叫んだ。

「ずっと思っていたことだけどあさひはアーティストとしての力が強すぎるよ。

だから俺と付き合ってもいい曲作れない。

あさひは俺と別れないとだめだ。」

「いやーーーー!!

私は幸助君とずっと一緒にいる。

歌手なんてやめるよ。」

「馬鹿なこと言うな。

こんなすごい才能そうないんだよ。

俺なんかと付き合ってもしょうがないよ。

あさひがダメになるだけだ。」

「私歌手やめて、幸助君と結婚するよ。」

「俺はそれはできない。

プロダクションの看板俳優だから。

せめて 30 代になるまでは結婚もしないと事務所と契約してるんだ。

ごめん。

あさひ。

俺遠くからあさひを応援しているから。

あさひ、今までありがとう。

愛していたよ。」

これがあさひに発せられる最後の幸助の言葉になった。

あさひはその夜夢を見た。

あさひは真っ赤なドレスを着ていた。

どうやらフォークダンスを踊っているみたいだった。

向かいには男の人がズラリ。

その中に幸助もいた。

後一人で幸助と踊る番になった。

そしてあさひと幸助が踊る番になった。

幸助はあさひの手をはらいのけた。

いつかの初恋の時の透君みたいに。

あさひは泣きながら目が覚めた。

あさひは泣きながら曲を作る。

「水色の桜」

窓の外は春

桜の舞う季節

この世界にあなたがいないだけで

桜の色は水色

桜の色が教えてくれる

もうあなたがいないってこと

桜の色が教えてくれる

もうあなたと会えないことを

窓の外は春

水色の桜舞う

この世界にあなたがいないだけで

南風は北風

あさひは幸助との別れの歌を 10 曲くらい作った。

アルバムも作った。

皮肉なことに幸助と付き合ったことにより去って行ったファンが戻ってきた。

あさひが幸助と別れて 2 年経った。

そんなある日衝撃的な事件が起こった。

ワイドショーを観ていたら、こんなビッグニュースが流れた。

「えー、シンガーソングライターのあいりさんが今朝睡眠薬を大量に飲んで自殺をはかりました。

幸い一命は取りとめました。

現在病院に入院中です。」

あさひがびっくりしていると、電話が鳴った。

急いで出ると、あいりからだった。

「今水城病院に入院しているの。

ワイドショーで私のこと話題になっていてびっくりしたでしょ？

私、死にたいくらいに辛いことがあって。

あさひさん、今から来られる？

あなたにだけは話を聞いて欲しくて。」

あさひは急いであいりの入院している水城病院へ行った。

病室へ行くとあいりはげっそりと痩せていた。

いくらなんでも痩せすぎだと思った。

頬がこけていたので。

あいりは突然、あさひに抱きついて号泣した。

「あいりさん。

どうされたんですか？

どうして自殺なんて…」

あさひも泣き出してしまった。

二人で抱き合って涙を流した。

「私、古賀稔と付き合ってたでしょ？

彼にふられたの。

私が重いつて言われて。」

古賀稔とは。

あさひと同年のシンガーソングライター。

男性シンガーソングライターでは一番の人気だ。

あいりとは稔はもう付き合って 5 年になる。

世間も知っている間柄だ。

結婚秒読みと言われている仲だった。

「そもそも稔は私たちが付き合っていることばれるのは嫌がってたの。

私は逆にみんなに稔と付き合っていることを知って欲しくて。

私の方から友達に話まくってばらしたの。

稔は自分の歌詞に出てくる女の子が誰かわかってしまうことが嫌で。

聴き手に妄想させたかったみたい。

それ自体ですごく彼とこじれて。

私は恋をすると何も見えなくなるのよ。

中学校の頃からすごい恋愛体質で。」

これはよくわかっていた。

あいりはシンガーソングライターとしてはすごい才能を発揮していたが、恋愛には盲目的な部分があった。

相手を好きになるあまりに数々の奇行がワイドショーで話題になっていた。

稔と路上でキスしたり、稔のマンションから何日も出てこなかったり。

あいりは恋愛にはかなり不安定になる体質だった。

でもそれだけ重くて大きい愛を相手にそそぐあいりだからあいりの曲はどれも迫力があつた。

「ごめんね。

あさひさんも忙しいのに私のためにこんなところに来てもらって。

死ぬつもりなんてなかったの。

稔が別れるなんて言い出すから、あてつけに睡眠薬を飲んだの。

そんな大量でもなかったのに。

こんなに気分が悪くなるなんて思ってなくて。

気絶していたら友達が来て。

救急車を呼んだのでワイドショーの記者にもばれてしまって。

あさひさんにお願ひがあるの。

稔にもう一度よりを戻そうって私が言っていたと伝えてくれる？

もう稔に重いだなんて思わせないから。

稔の重荷にならないよう努力するからって。

レコーディングも2年間出してなかったけど、ちゃんと曲も作るからって。

私、この2年間苦しいことばかりで悲しいことばかりで曲が作れなかったの。

恋する人に夢を与えるような暖かな歌、作れなくて。

マスコミにはあいりワールドの崩壊なんて言われて。」

なんてことだ。

あさひは私生活が幸せすぎてあさひワールドが崩壊した。

あいりは反対に私生活が不幸だったからあいりワールドが崩壊したのだ。

あさひはあいりほどの恋愛体質ではなかった。
でも曲が作れないという苦しみ、これは誰よりも理解できた。
だからあさひは稔とあいりの心の橋渡しを引き受けた。
あさひは稔のレコーディングスタジオに行った。
稔はギターを弾いていた。
無精ひげをはやした稔は仙人みたいに見えた。

「こんにちは。

古賀さんですよ？」

あさひは恐る恐る尋ねた。

あさひは未だに男の人と話すのは苦手だ。

しかも古賀稔はすごく話しかけづらいオーラがあった。

「あさひさん？

どうしてあさひさんがここに？

レコーディングでもするんですか？」

「あいりさんからことづてがあるのでこちらに来ました。」

「帰ってくれ!!

俺はあいつとはもう別れる。

あんなことして。

どうせ死ぬ気もないくせに。

あいつの考えそうなことだ。

俺はもうあいつに対しての恋心なんて残ってない!!」

あさひは稔にすごく腹が立った。

「最近のあいりさんの姿見ましたか？

可哀想なくらいに痩せ細ってしまっ。

それぐらい古賀さんのことを好きだったんですよ。」

「好きって相手のことを何も考えないで行動することか!!

あいつはそもそもそのことがわかってない。

ただやみくもに好きだ好きだって言うだけが愛だと勘違いしてやがるんだ。」

「自分が自分じゃなくなるくらいに好きになったから変にもなったんじゃない!!

恋に盲目になるくらいに愛してたんですよ。

なのになんでそんなにひどい言い方!!」

「とにかく、俺はあいつとはもうよりを戻すことはないよ。

俺はもう疲れたんだ。

これ以上二人でいても不毛だ。

お互いに何も生まれないよ。

俺のシンガーソングライター人生も危うくなりそうだったんだ。

変な歌しか作れなくなって。」

「自分のことばかりじゃないですか？

例えあてつけだったとしてもあいりさん、本当に病人みたいにやつれて今病院にいます。

せめてお見舞いくらい来てください。」

「お見舞いだと。

ワイドショーの記者に見つかったらどうするんだ。

迷惑なことに今、このスタジオの外にも記者がいっぱいいるんだぞ。

あさひさんは裏口から来たから気がつかなかっただけで。

いい機会だ。

俺はあいつと本当に別れる。」

「そんな…

あいりさんが可哀想すぎます。

せめてお見舞いくらい。」

「帰ってくれ。

よりを戻す気がないのにここで中途半端に優しくすることの方が相手にとって罪になることもある。

俺はここでぱったり縁を切るよ。」

あさひはがっくりと肩を落として、あいりに元に帰った。

あいりはこう言った。

「今日、稔が言ったことすべて正直に言ってちょうだい。」

あさひはあいりのためを思って、残酷だけどあいりに全部話した。

「私は負けないわ。

こんなこと言われたぐらいで引き下がらない。

何も傷つかないわ。

私が傷つくのはあいつに会えなくなることだけ。」

さすが日本を代表するシンガーソングライターあいりだった。

こんなことではめげないみたいだった。

あさひは毎日稔に会いに行くことになる。

稔も不思議なことにあいりの言い分を聴いてくれた。

心のどこかではあいりとよりを戻したいと思っているのか。

あいりと稔とあさひ、妙な関係が出来上がった。

やがてあさひは偶然にも稔と一緒に仕事をするようになった。

基本的にあさひの売り出し方としてはテレビに露出ししない。

しかしそれだけでは中々CDを聴いてもらえない。

当時 1996 年はテレビに露出しているアーティストたちがミリオンセラーを連発していた。

そこでスペースシャワーのある番組のコーナーで、男女のアーティスト同士がデートをするという企画が持ち上がった。

稔とあさひが毎週東京や横浜のデートスポットでデートをすることになった。

稔とあさひはあいりのことでしょっちゅう顔を合わしていたので、お互いに話しやすくなっていた。

東京タワー、東京ドーム、よみうりランドなど稔とあさひはデートした。

それでますます稔とあさひは仲が良くなっていった。

あさひは稔とデートしながらもあいりとの仲を取り持ってはいた。

でも次第に稔があいりの話をすると黙り込み気まづくになるのだった。

その日は鎌倉に来ていた。

大仏を見た後、紫芋ソフトクリームと一緒に食べていた時だった。

「あさひさん。

今付き合っている人いますか？

いなかったら俺と付き合ってくださいませんか？」

空耳だと思った。

稔から告白を受けるなんて。

実はあさひも稔と会えば会うほど好きになっていった。

でもあいりがあんなに好きに人なので自分の心をごまかしていた。

稔のことを好きになったらだめなんだといつも自分の心に暗示をかけて。

あさひは泣き出してしまう。

「ごめんなさい。

稔さんのことすごく好きなんだけど。

好きになってはいけないと思っていつも自分に暗示をかけていて。

私たち付き合うことなんでできないじゃない!!」

「あいりのことがあるからか。

それなら俺が直接あいつに言うよ。」

一緒に今からあいりと会おう。

1996年やっとみんなが携帯電話を持ち出した。

あいりの携帯電話番号をあさひが知っていたので稔に教えた。

そして青山のお洒落なレストランで3人で待ち合わせした。

稔は神妙な顔であいりに言った。

「お前より好きな子ができた。

あさひに会うたびにあいりが遠ざかって行ったんだよ。

会うたびにあさひが俺の心の中を占めていった。

ごめん。

俺残酷なことをしているな。

本当に悪い、あいり。

俺、これからの人生あさひと生きていく。」

半分涙声で稔がそう言った。

あさひは意外にもしゃんとしていた。

「そんなことずっとわかっていた。

スペースシャワーの番組見ていてすぐにわかった。

稔、わかりやすいんだもの。

でもあさひさんならいい。

大好きな二人が付き合うんだもの。

稔、あさひさんを幸せにしないとだめよ。

最初から私もそのことをどこかで望んでいたかも知れない。

同じ取られるのならあさひさんがいいってね。」

あいりは背筋を伸ばしてふっきれた顔で言った。

あいりはその後、以前より深い恋の歌を作ることができるようになっていった。

こうして稔と付き合うことになった。

あさひはシンガーソングライターという同業者と付き合うのは初めてだった。

それがどんなに苦しいことなのか最初はわかっていなかった。

稔はあさひに対し愛の歌をいっぱい作ってくれた。

でもあいりの時に作った歌と比べると全然重みが違う。

あさひに対してはほのかな恋の歌といったところだ。

でもあいりに対しては深い愛の歌なのだ。

おとなしいあさひといたら安らぐしほっとする。

でもあいりは半狂乱になり自分の全部を稔にぶつけるので落着けない。

そんな中から生まれる愛は重くて深い。

ファンレターにも今の歌より昔の歌の方がいいという意見の方が多い。

やがてあさひと稔は喧嘩することになる。

「稔!!

どうしてあいりさんに作ったみたいな曲作れないの？」

「ちゃんとあさひに対して恋の歌作っているじゃないか？

おれはあいりに作った曲よりあさひに作った曲の方が好きだぞ。」

「嘘よ!!

あいりさんと付き合っていた頃の曲の方が深みがあるよ。

あいりさんに対して作った曲と私に対して作った曲と全然違う。

そのせいか、私に対して作った途端、稔売れなくなったじゃない!!」

レコードセールスにまで影響していた。

こんな喧嘩が絶えなくなった。

あいりの作曲活動は、稔に対して不満があるのでそれを歌にしてそれなりに売れていた。
でも稔は作曲に苦しんでいた。

あいりといったら幸せ過ぎて落ち着いた曲しか作れなくなってしまった。

またコンサートのセットリストにもお客さんから不満の声があがってきた。

あさひに対しての曲しか歌わなくなったので妙にしっとりとしたライブになってきた。
観客動員も減ってしまったので、これではいけないと思い、あいりに恋していた頃の曲
を入れることにした。

次第にあいりに恋していた頃の歌ばかりになってきた。

昔の曲だけで勝負するようになってきたのだ。

あさひは時々稔のコンサートにお忍びで出かけたが、稔の歌の世界から少しずつ自分が
消えていくのがわかる。

代わりにまたあいりが稔の世界に入り込んでくる。

歌もあさひのことを思って作った歌は優しい歌声だが、あいりに対して作った曲は激し
い中にも深い愛情がこもった歌声なのだ。

あさひは自分が消えかけた稔の世界を見て、ある一大決心をした。

あさひは稔と喫茶店で向い合って話した。

「あいりさんとよりを戻してください。

やっぱり私と稔では稔ワールドが作れない。

私もまた稔の激しい愛の歌、聴きたいです。

そしてそれはファンが望んだ稔ワールドなんです。」

これが最後の稔とあいりへの愛の橋渡しとなった。

やがてあいりと稔はよりを戻した。

稔と別れた夜、夢を見た。

また真っ赤なドレスに身をつつんでいる自分。

そして向かいにはタキシードを着た男の人がずらっと並んでいる。

フォークダンスが始まった。

色んな男の人と踊っていた。

次は稔だ。

そして稔の番になると…

いきなり目の前にあいりが現れた。

あいりと稔は一緒に仲良く踊りだした。

そしてそこで目が覚めた。

あさひの頬には涙が光っていた。

あさひは幸助との別れ、稔との別れから数えきれないくらい曲を作った。

あいりも稔とよりを戻しより一層深い愛の歌を作ることができるようになっていった。

あさひはデビューからずっとコンサートをやっていなかったが 1999 年からついにコンサートツアーをすることになった。

あさひはひどいあがり症だったのでずっとやってこなかった。

そんなあさひなのでリハーサルの段階で胃腸にきて病院通いすることになった。

池内医院というリハーサルスタジオの近くの病院に通うことになった。

親子 3 代にわたって病院を運営していた。

池内憲治というあさひより 5 つ上の医師があさひの担当となった。

「岩井あさひさん。

シンガーソングライターという職業ですね。

曲を作られて歌われているのですか？」

「はい。

自分の体験したことを歌にして歌っています。」

「この職業に就かれてから、胃腸が弱くなったのですか？」

「いえ、私は胃腸は強い方でした。

この度初めてコンサートツアーをすることになり、私はあがり症なので、胃腸にきてしまったんです。」

「念のため採血をします。

肝臓や貧血を調べます。

尿は異常はありませんでした。」

血液検査は異常なかったが、胃腸の調子が相変わらず悪いので、薬をもらうことになり、週 2 日くらい、この病院に通うことになった。

憲治はメガネをかけていて真面目そうで固そうでいかにも医者という風だった。

そんな憲治から思いがけないことを聞く。

「あさひさんの CD 買いましたよ。

全部で 10 枚全部。」

あさひはびっくりする。

「私の CD を買ってくださったんですか？」

しかも全部。」

「患者さんの内面も知っておかないとね。

あさひさんはかなりネガティブですね。

後ろ向きというか。

だから胃腸にそれが影響してくるようですね。」

「それが私の曲の特徴なんです。

ファンのみんなが期待する私なんです。」

「人の不幸を期待するんですか？」

「不幸を期待するというより、不幸になって苦しんでいる私の歌の世界をみんな聴きた

がっているというか。」

「なんと嘆かわしい!!

今の若者は自分より不幸で苦しんでいる人を見て喜ぶんですか？」

ここまで話したところで看護婦長らしき人が入って来た。

「先生、またお話が長すぎますよ!!」

話を遮った婦長に連れられ待合室へ行った。

「すみません。

あの先生は患者さんに深く関わり過ぎるきらいがあつてね。

話がすごく長くなるんですよ。」

笑いながら婦長さんが言った。

そんなある日、あさひが月に一度楽しみにしてよく来ていたフランス料理の洋風懷石の店でばったり憲治と出会った。

二人とも一人の席を予約していたのでせっかくなので二人で食べることになった。

「ここへはよく来られるんですか？」

先生。」

「私はここの常連です。

岩井さんもよくここへ来られるんですか？」

「月に一度の贅沢をさせていただいてます。」

「ちょうど良かった。

岩井さんの仕事のことを聴かせてください。

あの看護婦長は仕事に厳しすぎるところがあるんですよ。」

そう言って憲治は笑った。

「この間の続きですが、私は私生活で傷ついたことを歌にしています。

そしてそんな私の作り上げた世界を愛してくれる人たちが CD を買ってくださいます。」

「私が気になるのはファンよりあなたです。

ファンのために自ら幸せにならないようにしているみたいで。」

「最近思います。

私は一生独身でいた方がいいんじゃないかって。

そしてその寂しさを元に曲を作っていきたいなって思ってた。」

「私にはあなたのやることの意味がさっぱりわかりませんね。

たかが歌謡曲にどうしてそこまで自分の人生を犠牲にしなきゃならないんですかね。

あなたのことをわかれようとして CD も聴いてみましたが、実は良さがさっぱりわからなくて。

あなたの人生を犠牲にしてまで作る歌なんですか？」

失礼ですが私の感想です。」

あさひにとったら初めての経験だった。

あさひの作る暗くて深いあさひワールドはありとあらゆる業界人に褒められ続けてきた。

それを真っ向から否定されたのである。

あさひは悔しくなった。

「私は大体歌謡曲は聴かないんです。」

第一歌謡曲という表現の古さは何なんだろうとあさひは思った。

「たまに患者さんになった人の心理を知るために CD を聴くくらいで、仕事以外では主にクラシックばかり聴いてます。

仕事以外でそういった歌謡曲は好んで聴きませんね。

あんな下品なもの。」

「下品ですって!!

私たちがどんな思いで作っているのか先生知らないでしょう？

常に自分の身を削って命がけで作ってるんですよ!!」

「あなたは社会経験がないでしょう？

歌手以外に仕事をしたことないでしょう？

だからあまりにも世界が狭すぎる。

もっと他の世界も知るべきだ。」

凶星だった。

あさひは大学卒業と同時にプロになり、いきなり芸能界に入った。

引っ込み思案だったのでバイトすらしたことなかった。

「私に他のところでも働けというんですか？」

「そうじゃない。

自分とは全く違う職業をしている人ともっと話すべきだと言うんです。」

「友達とは遠く離れてて、会う機会もないんですよ。」

「それなら私とこうして会いませんか？

色んないい店知っていますよ。

私が世の中のことを色々話してあげます。

私はさまざまな職業の人と深く関わっていますから。

色々な職業の人の苦悩も知っています。

もちろんあなたのような歌手の人の苦労も色々聴いてきました。

この病院はスタジオに近いので芸能人の方も多く来られていますしね。

でも全員に言えることは世間知らずだってことです。」

こうして憲治とあさひは頻繁に食事をするようになった。

そして段々、食事以外でも二人で会うことになった。

憲治はクラシックしか聴かないのでクラシックコンサートに行くことになった。

あさひはピアノを習っていた時にブルクミュラーやチェルニーは知っていたが、モーツ

アルトやバッハなどの曲には疎かった。

『ブランデンブルク協奏曲』や『管弦楽組曲』も知らないのですか？

そんな常識もないんですね。

それでよく音楽やってますね。

クラシックの曲でせめて有名な曲くらいは知っておかないとだめですよ。

それくらいは知っておかないと日本の音楽界の恥です。」

憲治はバイオリンとオーボエを演奏することができる。

今流行している音楽には疎いが大抵のクラシックの曲を知っていた。

いつもこう言ってあさひをしかった。

あさひはクラシックはすべて同じに聴こえた。

そしてクラシックコンサートでは眠くなり眠ってしまう。

それを見てまた憲治に叱られる。

ある日はモネの美術展に行くことになった。

憲治は絵の趣味もある。

風景画がすごく好きでよく休日には写生をしに出かける。

「モネは印象派の画家で光の画家と呼ばれてたんですよ。

時間や季節とともに移りゆく光と色彩の変化を追及した画家だったんですよ。」

あさひには絵心がないのでどれも同じに見える。

はっきりと言って退屈だった。

あさひと憲治は趣味が合わないながらも色々な場所に出かけた。

ある日びっくりすることを言われた。

「あさひさんそろそろお互いの両親に合わないよね。

僕たち結婚するんだから。」

プロポーズもされてないのにいつの間にか結婚することになってしまったのだ。

あさひはきついことを憲治から言われながらも学のある憲治に惹かれていたので二人は結婚することになった。

ワイドショーはこれ以上ないスクープに熱くなる。

「魔性の女シンガーソングライターあさひ医師と電撃結婚!!」

「イケメン俳優、大物シンガーソングライター、次は医者と熱愛発覚」

「恋多き女性あさひついに医師と結婚か!!」

ワイドショーの中ではあさひは常に魔性の女。恋多き女と言われることになっていた。

街角インタビューだとこんな感じだ。

「あさひは今度は医者と熱愛ですか？

金目当てなんじゃないですか？」

「あさひと医者じゃ釣り合い取れないよ。

どうせすぐ離婚するんじゃない!!」

「あさひはおとなしい顔してやるね。
イケメンと熱愛、略奪愛に、医師と結婚か。
なんであんなのがもてるかね。」
世の中ではそう見られていた。
これに対し、憲治が怒り狂った。
「あさひさんの住んでいる世界は下品ですね。
あの子供じみた番組はなんですか？
馬鹿ばかりが馬鹿に向けてテレビを作ってるいんですね。
こんなに恥をかかされたの初めてですよ。
今朝私の家の近くにも記者がいっぱいいてマイクを向けられましたよ。」
「ワイドショーと言って、歌手や女優が付き合ったり、婚約したり、結婚したりすると、
記者が面白おかしく書き立てるんです。
そしてそれを見ている一般の人が街頭インタビューで好き勝手言うんです。」
「あさひさんみたいな一般人はそれを見て喜ぶんですか？」
「私はいつも明日は我が身と思って喜んでなんかいません。」
あさひと憲治はワイドショーのことで気まずくなり溝ができてしまった。
「あさひさんはつまらない歌謡曲をいつまで作り続けるつもりですか？
あんなくだらないもの作り続けていても何の得にもなりませんよ。」
「つまらないなんてひどいじゃないですか？
私は身を削って命がけで一生懸命作っています。」
「私が今まで付き合った女性は、もっと崇高な音楽を演奏していましたよ。
フルート奏者、バイオリン奏者。
ウィーンに留学して一流のオーケストラ奏者になっていました。
あなたはそれに比べて下品すぎる。」
「憲治さんが今までに付き合った女性ってそんなにすごい人ばかりなんですか？」
「女医をしていた女性、理工学部の助教授などです。
ああ、あの頃は幸せでしたね。
素晴らしい女性と付き合えて。
みんな一流の仕事を胸を張ってしていて。
私も負けていられないと思って仕事に励みました。
みんな上品だったなあ。」
「憲治さんは私よりも昔の彼女ともう一度やり直したいんですか？
私は下品だから昔付き合った女性みたいに上品な人と。」
「そりゃ男に生まれたら、一流の美術や音楽、文学など高尚な趣味のたしなみがある女性と付き合いたいものですよ。
そして一流の仕事についている女性と付き合いたいものです。」

誰が下品で三流の女の人と付き合いたいものですか？」

あさひはここまで言われてこれ以上ないくらいに深く傷ついた。

今まで付き合った美男子の俳優幸助にしてもシンガーソングライターの稔にしてもあさひはトップクラスのシンガーソングライターだったので尊敬していた。

下品だとか低レベルだとか思われたこともなかった。

あさひは芸能界しか知らなかったで自分では気がつかないうちに女王様みたいにプライドが高くなっていたのだ。

この世界は自分が思っているより広くて、自分は井の中の蛙大海を知らずだったのだ。

あさひはこれまで付き合った男性で一番憲治を尊敬していた。

自分を馬鹿にするようなことばかり言う憲治だけどそこにも愛があり、自分を一流の人間にしようと耳の痛いことも言ってくれると思って我慢した。

年が離れていることもありこれまでに好きになった幸助や稔と違って包容力もあった。

自分の知らない世界をいっぱい知っているのですごく勉強にもなった。

憲治なら自分の精神を高めながら付き合っていけるだろうと思っていた。

付き合っていて決して楽しいだけの相手ではなかったが。

憲治の高い教養は自分が向上していく上で必要だと思っていた。

あさひと憲治が合うのはいつもフランス料理店や寿司屋、懐石料理店だった。

あさひが好きなファミレスに一度憲治を連れて行きたくなった。

逆に憲治にも自分の好きなものを知って欲しくて。

「しかしまた、品のないレストランですね。

なんですか、この落ち着かなさ。」

メニューの下敷きを手にとると。

「いったい何を食べたらいいんですか？」

「ハンバーグや唐揚げもありますよ。」

「ハンバーグ？」

そんな庶民の食べ物をこの私に食べろと言うんですか？」

「食べてみたらわかります。」

ハンバーグが運ばれてきた。

「ほら、憲治さん。

鉄板上のハンバーグ美味しそうですよ？」

じゅじゅってなって。

このおこげが美味しいんですよ。」

「どれどれ。

なんですか？」

この味は!!

ミンチが、安っぽい!!

一般人はこんな下品な味付けのもの食べてるんですか？」

あさひはブチ切れた。

「下品だとか一般の人だとか品がないだとか!!

医者がどれだけ偉いんですか？」

憲治さんが受け持つ患者さんはこんなファミレスにも行くし、私たちのような歌謡曲も聴くんですよ。

患者さんの住む世界のこと理解できないで何が医者ですか？」

もっと世の中のこと勉強したらどうなんですか？」

「君は何を言っておるのだね!!

この私に勉強しろだと？」

これだけ色々な勉強してきた医者に対して失礼だと思わないのかね!!」

あさひはどうしようもなく腹が立ったので水を憲治にぶっかけて去って行った。

それから、あさひは憲治と会っていなかった。

あさひは後ですごく反省した。

つい感情的になってしまっ

自分の一番悪いところを憲治に見せてしまった。

これでは小学校の時に意地悪な女の子にくってかかった時と同じだ。

成長がないと思い自己嫌悪に陥ってしまう。

確かに憲治は私たち一般人を見下しているようなところがある。

でも医師は患者の病気を手術をしたり、薬を投与したり、治療したりして治すのが仕事。

命を救う仕事をしているのだから、自分が偉いと思うのが当たり前かも知れない。

確かに医者がいなかったら、みんな健康に生活したり仕事したりできない。

あさひ自身医師の有り難みを理解していなかったのだ。

あさひと憲治が付き合っ

て三ヶ月経っていた。

憲治とのデートは今までの稔や幸助と違って楽しいだけではなかった。

憲治はあさひの知らない世界をいっぱい教えてくれた。

美術やクラシック、食事のマナー。

水族館や動物園に行ったとき、生物のことについて教えてくれたりもした。

キスもしたことのない付き合いだけ

ど。

デートして三ヶ月で結婚も考えてくれた。

あさひのことをここまで考えてくれた恋人もいなかった。

そうこうしているうちに初めてのツアーが三か月後に始まる。

あさひはどうしてもこのツアーに来て欲しいと思った。

あさひは憲治が自分の音楽を下品だと言ったことだけが、気にかかる。

くだらない歌謡曲とも言われた。

昔付き合っていた彼女はクラシックのバイオリンやフルート奏者。

上品だと言っていた。

ふといいアイデアが浮かんだ。

三ヶ月あればオーケストラ演奏も練習できる。

エレキ、ベース、ドラム、キーボード、ボーカルの 5 人で演奏しようとしていたが、今からオーケストラ演奏にしたらどうか？

バイオリンやチェロ、フルート、トランペット、オーボエ、バックコーラスなど。

それに全国で一番音が綺麗なコンサート会場に来てもらうことにしたら。

オーケストラ演奏にすることにより、あさひの恋愛や人生の苦悩をより一層表現できるかも知れない。

あさひは憲治に感じて欲しいと思った。

今までの人生の苦勞を。

女の子には野蛮人、男の子にはバイキンと言われたこと。

フォークダンスを男子に踊ってもらえなかったこと。

初恋の人に言われたひどい言葉。

初めての親友にぶつけられた言葉。

幸助と付き合って自分の世界が崩壊したこと。

稔の歌の世界が段々元の彼女であるあいりという女神に変わっていったこと。

全部オーケストラで表現し、それをバックに歌う。

自分のできるありったけの力を振り絞って憲治に捧げたくなった。

スタッフに探してもらった。

日本中で一番音もロケーションも美しいホール。

それは滋賀県にあるびわ湖ホールだ。

グッズ売り場のところがびわ湖が見られるようになっているらしい。

びわ湖を見ながらケーキを食べたり、紅茶や珈琲が飲めるようになっている。

元々クラシックのみコンサートをするために建てられたホールなので音がどこのホールよりも綺麗だそう。

客席もクラシック用になっている。

そのびわ湖ホールを記念すべきあさひの初めてのコンサートの初日にすることにした。

あさひは猛練習をした。

あさひの歌の世界はくだらなくない、それを伝えたかった。

憲治にびわ湖ホールのチケットを送った。

一番前のど真ん中の席だった。

そして当日がやって来た。

開演時間 18 時 30 分になった。

まだ憲治は来ない。

涙をこらえて、あさひは歌う。

オーケストラに身を委ねるみたいに寄り添うように歌う。
あさひのこれまでの人生の悲しみのすべてをオーケストラにのせて歌う。
観客が感動しているのが伝わってくる。
観客の感動を感じ、ますます抒情的にあさひは悲しみを表現していく。
孤独、失恋、絶望、別離、失意がオーケストラの効果もあり、立体的になって表現される。
残りは後1曲、あさひがこの日のために憲治に作った曲だ。

『クーデター』

今日からこの恋は私のもの
もうあなたに合わしたりしない
私が恋の主導権を握るの

あなたが間違っていたら
間違っていると言うわ
それで恋が終わるのなら
ただそれだけの恋

曲の途中で…
憲治が一番前のど真ん中の席に座った。
憲治は涙を流していた。
憲治が…
見に来てくれたのだ。

あさひと憲治の関係はその後も変わらない。
憲治は相変わらずあさひの作る曲はくだらないと言う。
あさひに教養がないと馬鹿にする。
たった一つ変わったのは。
あのファミレス以来、憲治が間違っていることがあったら間違っていると言う。
憲治とあさひは相変わらず価値観が違っていた。
でもあさひはそれでいいと思った。
憲治にひどいことを言われ、喧嘩になり、傷つく。
そこからいっぱい歌が生まれるから。
あさひは自分を尊敬し、いたわる彼氏だと曲が作れない。
あさひワールドが崩壊してしまう。
自分をみじめにしたり、傷つけたりする相手じゃないとあさひワールドは作れない。

あさひはそれにしても憲治はきついことばかり言うなって思った。

ねちねちしていて女の子みたいだった。

憲治にひどい言葉を言われるといつも頭の奥がガンガン鳴る。

この感じ以前もあったなあ、いつだっけ？

思い出そうとした。

これは男の子に言われた言葉じゃないなと思った時だった。

そうだ、千鶴に言われた言葉だと思い出す。

『なんかあさひ飢えた子みたいね。

見苦しいよ。

私にやきもちやいて…

今のあさひすごく醜いよ。

嫉妬に狂ってて。

そんな見苦しいから勘ちゃんにもふられるのよ。』

あさひは絶句した。

女の子の心の奥底ってもしかしてみんなこれぐらい醜いもの？

それが普通？

それに核心に触れてくる。

相手が一番傷つく言葉を女の子はみんな知っている。

憲治さんはいつも私が一番傷つく言葉を言ってくる。

そして傷つく私を見て密かに喜んでいる。

ということは憲治さんは魂が女ってこと？

そしてあさひはまたはっとした。

どうして自分は相手が傷つく言葉を言えないんだろう。

小学校の時も意地悪な言葉を浴びせられ言い返せなかった。

そしてブチ切れて相手の胸倉を掴んだ。

こんなことでブチ切れるってことは私は男？

意地悪な言葉で応戦できないってことは私は男？

核心が何かわからないってことは私は男？

そして初恋の人、透君に言われた言葉を思い出す。

『最後に一言だけ言っておく。

お前、なんか変だな。

変な行動、やめた方がいいよ。』

変なのは、あさひの魂が男だったからだ。

急いで憲治に電話した。

憲治は驚かなかった。

「この間、水をぶっかけられた時に思っていました。

ドラマじゃあるまいし、本当にそんなことする女がいるんだなってね。
いやそれ以前にもあさひさんの昔の言動や行動を聴いていると今まで付き合った女性と全く違うって思っていました。
これだけ打たれ強いのにどうして周りとうまくやっていく根気強さがないのか不思議でした。
それに私がひどいことを言っても言い返せない女の人には実は初めてで。
みんなあんなひどいことを言ったら怒って別れるって言われるか、あるいはもっとひどい言葉が返ってくるかでした。
あさひさんに言われた言葉なんかじゃ少しも私は傷つかなかったけど、昔の彼女は頭が痛くなるくらいにひどい言葉を言って私を傷つけたものです。
私は実は女の人にはもてなくて。
いつも言い合いになって別れて。
女の人とは長続きしたことがなかったんですよ。
それは魂が女だったからですね。」
「やっと私たちが出会った意味がわかった気がしました。
私たちこれでやっと本当の男と女になれたってことですよね。
たとえあべこべでも。
私たちは男と女だから分かり合えない。
だからこそ生まれる音楽があります。
憲治さんは女と男の両方の気持ちがわかるようになるから診察にも役立つことになる。
これでいいんですよ。」

あさひと憲治は結婚した。
そしてあさひの第一弾シングルが届く。

『私たちは合わない』

私たちは合わない
好きな映画も好きな音楽も好きな文学も
私たちは合わない
好きな食事も好きな絵画も好きな服装も

あなたの言葉は私を傷つける
私の言葉はあなたに届かない

私たちはこんなにも違う人間だから

わかりあえず悲しい曲しか作れない
私たちはこんなにも違う人間だから
私とあなたの間に芸術作が生まれる

あさひは真っ赤なドレスを着ている。
そして目の前にはタキシードを着た紳士が並んでいる。
これは夢じゃない。
あさひは社交ダンスを習うことになった。
あさひも社交ダンスを踊る機会があるかも知れないので。
憲治の通う社交ダンスの教室だった。
あさひは憲治と手をぎゅっと握りあって社交ダンスを踊る。
くるり、くるり、くるり、くるり。

